江戸名所圖會

三

農商務省
圖書
第九六八號
共二册

太政官文庫
和書門
二三八七號
二一一函
九架
二〇冊

内閣文庫
和書類
二三八七號
二〇冊
七四函
九架

内閣文庫		
番號	和 11387	
冊數	19（ 2 ）	
函號	174	31

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

三緑山増上寺廣度院と號す關東浄家の總本寺十八檀林の冠首にして盛大の佛域より百一代 後小松院の御願にして開山ハ大蓮社酉誉上人中興ハ普光觀智國師なり

十八檀林ハ武總常野等に存在も阿弥陀佛六八本願の中第十八を以て最勝とする因に 御當家御称号松平氏の松や段歳を閲歴し能雪霜にあらされも文君子の操ありて志つりも太夫の封を受く其字や木公にして従ふ細にわかつときハ十八公なり依て是を弥陀の十八願にかくらしめ精舎十八區を建て永く栴檀林とし多く英才を育しく法運無窮の謀を設けられし御所存ハ永く安らかんるハ霜雪の後松樹の繁栄茂るかくとの盛慮に従ひ徽塞の御代を浄家の白旗流義により千代は万代までも守護し奉らんなる大きなる意を表しあらハしありとそ 江浄宗護國篇新著聞集等の意を採摘を

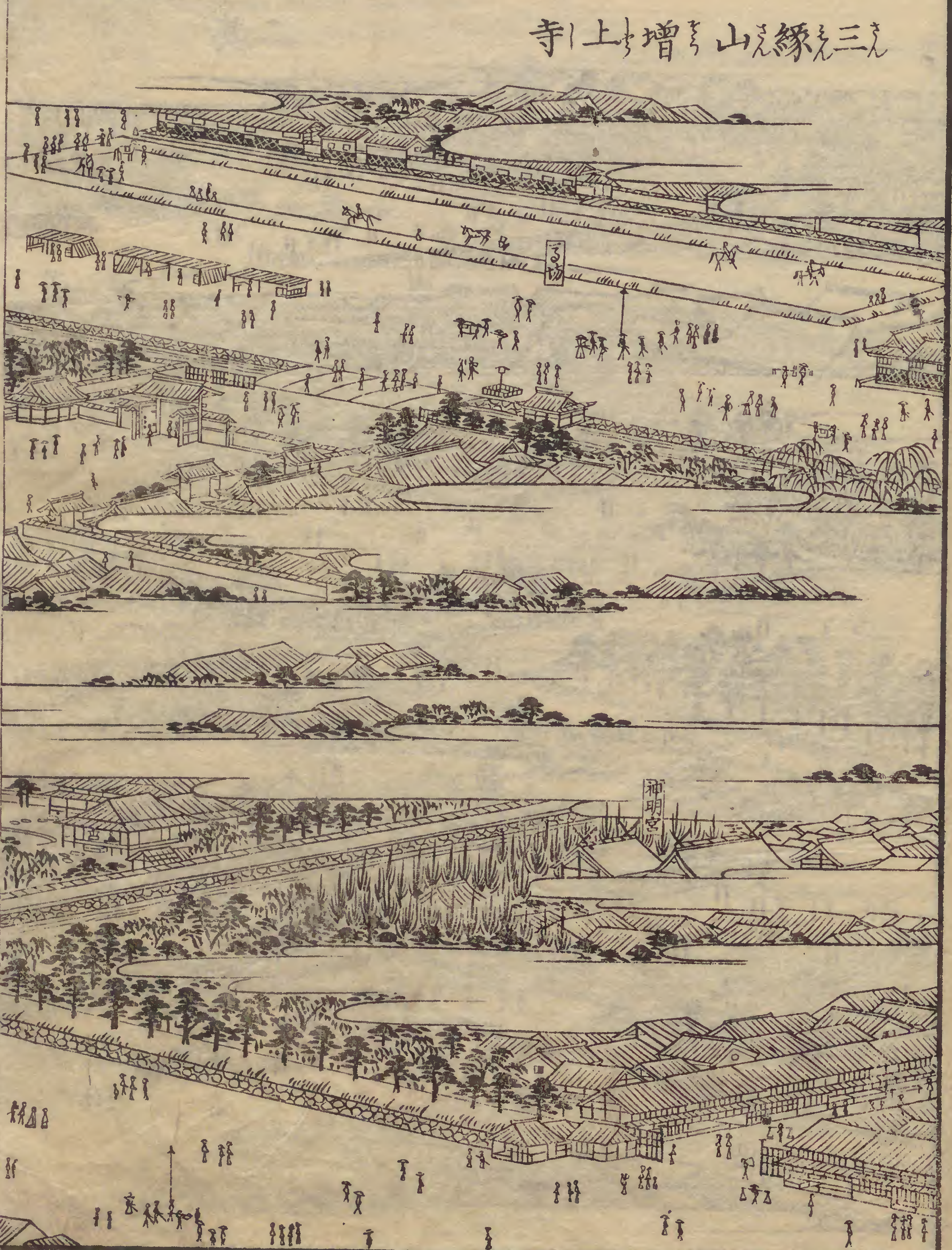
本堂本尊阿彌陀如来 惠心僧都の作にして座像御長四尺 或云佛工運慶の作なりと

額 三緑山

廓山上人真蹟 上人ハ當寺第十三世なり甲州の産にして高坂彈正の子なりといへり

御經蔵 本堂の前左の方辨の中にあり或人云ここに納る所の一切蔵経ハ宋版にして其先豆州修善寺にありて平政子の寄附なりとそ後彦坂九兵衛尉 台命を奉し當山に寄つきとなり菊岡沾涼云昔ハ方丈にありしを寛永九年照誉上人了学大和尚経蔵を創立しそるとなり今ハ官造に列す

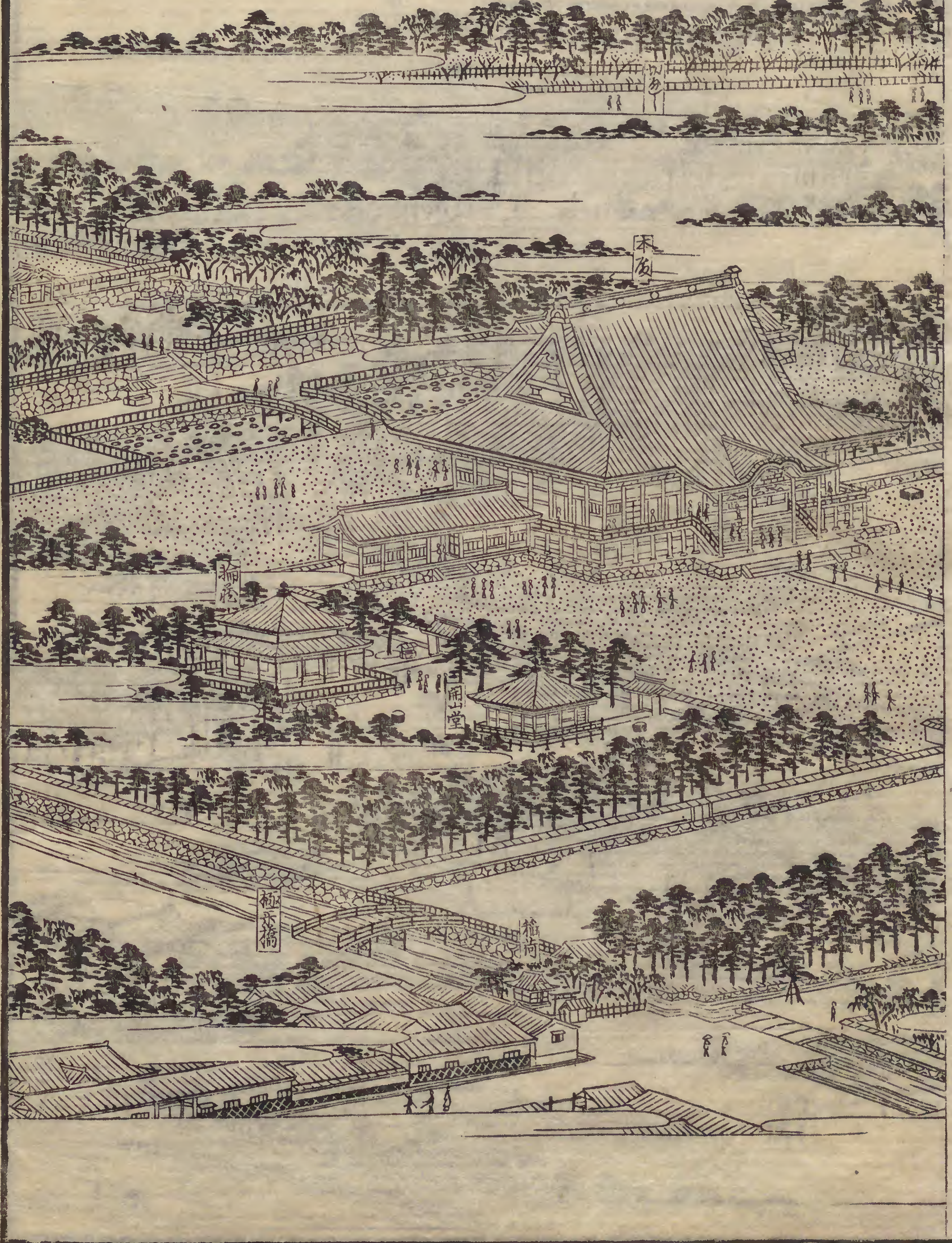
開山堂 同所左にあり當寺開山以下累世大僧正の尊像および靈牌等を置きけり



開山酉誉上人諱ハ聖聰大蓮社と号ス鎮西正統第八世の祖とす貞治五年
七月十日千葉系圖貞治二年六月三日とあり北總の千葉に生る父ハ千葉陸奥守
氏胤母ハ新田氏なり童名を德寿丸と云一書ニ徳千代とあり加冠して
胤明と称す出離の志深く釋典を慕ふ九歳ニして遂に同國
千葉寺に入て落飾し初ゝ密教を学ひ後同公に投帰して浄
宗に入智道倍熾なり其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺ニ
住せしる今の増上寺是なり江戸名勝志ニ云増上寺の旧地ハ糀町一丁目越後やしきと云辺なりとあり此寺始ハ真言瑜伽の
道場なりしか竟に光明寺を改て三縁山増上寺と号し宗
風を轉して浄業の精舎とす永享十二年庚申七月十八日
寂ス歳七十五臘六十七東國高僧傳に應永二十四年に寂す寿詳ならすとあり中興開山
勅賜普光觀智國師諱ハ存應字ハ慈昌貞蓮社源誉上人
と号す平山左衛門尉季重の後裔なり系図ニ云姓ハ由木又ハ金吾校尉源利重云く傳燈天文十三年護國篇十年ニ作る
武州由木に生る始衣を片山の宝臺寺に掘ひ十八歳感誉

其二

其三



上人に帰して登壇受戒す天資聰悟にして顯密の教を
究む上人没後上蓑に到て長傳寺を創し大に法席を
開く人呼て敎海の義龍蓮苑の祥鳳といふ天正十三年
雲誉上人の會下にあり同十七年八月璽書を傳兼して
増上寺第十二世となる（當寺第十二世より）同十八年天下安靖なるに逮
んで大に
大神君の眷顧をたまひ屢營中に請せしめて法要を聽
受したまひ崇信他に異なり竟に増上寺を修營せしめ
植福の地となしたまへり又
後陽成帝師を宮内に徴して道を問たまふ盛に淨教の深
旨を陳ぶ叡感ありて褒章を加へ新に宸翰を染たまひ
特に普光觀智國師の號を賜ふ時に慶長十五年七月十
九日なり元和六年師微恙を示す嗣君

増上寺山内
芙蓉洲(ふようす)弁天(べんてん)の社(やしろ)
池中に蓮多し

大将軍親ら臨ませて忝くも疾を問せらる十一月二日諸徒に遺誡し辭世の偈を書して曰く佛話提撕心頭塵末後一句但稱佛と筆を抛て端座合掌し佛号を唱へつゝ化を世壽七十有七僧臘六十 護國篇世壽八十とあり是なるべしといへり 門葉甡々として学徒流に浴を撰述する所 論義決擇集阿弥陀経直譚等大に世に行る 以上浄土高僧傳浄宗護國篇傳燈系図等に出づ

大銅鐘 本堂の右の方にあり鐘の厚さ一尺余口の渡り五尺八寸そのたかさ一丈程あり 銘曰新鑄洪鐘掛三縁山増上寺之樓 二十六世森誉上人歴天大和尚 延宝元癸丑年十一月十四日 神谷長五郎平直重 須田次郎太郎源祇寛 鑄工椎名伊豫吉寛云々 其聲洪大にして遠く百里に聞ゆ一撞の間の響尤長くして行人一里を歴るごとく諺に一里鐘と称せり後ひゞく當國熊谷の辺に聞ゆることありかしこは江戸より十六里ヶ隅づ又安房上総へも聞ゆることありといへり

熊野三所權現祠 同所にあり則當寺の鎮守にして護法の神と称せ

黑本尊堂 本堂の後蓮池より奥の方にあり本尊阿弥陀如来の像は惠心僧都の作なり御長二尺六寸相向圓備にして生身の佛體に向ふがごとし世人呼んで黑本尊と称せり多くの星霜を歴て金泥ことごとく変じて黒色となる故に此称ありとも或ハ源九郎義経守持せる本

故に九郎判官とのの意なりとも始参州桑子の明眼寺にありしを其の邑の調をゆく寺に奉不充此靈像をはなはだく常に念持佛としありしを覚當寺に迁しありとぞ元禄八年増上寺御修営の時桂昌一位尼公重く佛龕新くの宝帳玉扉構飾精巧を極むと 以上浄宗護國篇に載る所 正月十六日四月八日同十七日諸人ここに参詣する事をゆるさる

三門 元和九年癸亥御建立或云八年なりと 楼上に釋迦文殊普賢十六阿羅漢等の木像を置 正月七月の十六日二月八月の彼岸の中日又二月十五日四月八日等には登楼をゆるさる

安國殿 本堂構の外南の方にあり四月十七日ハ御祭礼にて参拝を許さる 参詣の人多し来由ハ其憚あるを以て是を略す 御別當を安立院と号す

五層塔 同所御佛殿の地蒼林の中にあり 酒井雅樂頭の建立なりといへり

涅槃石 同所にあり御影物師吉岡豊前作なりといへり羅漢石とも号く

曼荼羅石 同所にあり後藤祐乗得乗の作なりとぞ来迎石とも名づく

鷹門 同所にあり

極樂橋 同所前の溝に架せる

宗廟 御當家御代々の御靈屋なり 當寺院中より御別當を務む

御常念佛堂 涅槃門の右にあり惠照律院と号す浄土律にして當山の別院なり縦誉心岩上人開基す同巻赤羽心光院の条下に詳なり 當院に上人真筆の涅槃像の印板あり有信の輩に授与す 他の図に異なり

性壽庵 方丈の後の方にあり尾州清須城主松平薩摩守忠吉の霊牌を置 故に俗に薩摩堂とよべり 側に小笠原監物を始として殉死

五人の石塔あり　柳の井といふて同所南の坂通りにある名泉なり

飯倉天満宮　天神谷にあり當山の地主神なり昔飯倉の神明も此地にありしとかうそ社地に梅樹を多く栽て二月の頃一時の荘観なり

茅野天満宮　宝松院別當を　同所南の方松林院にあり神像ハ菅神の直作とぞ

圓光東漸大師舊跡　山下谷明定院にあり是も當山の別院なり明定院前大僧正定月大和尚明和七年に建立せる六間四面の堂にして戒檀造なり

圓座松　同所にあり

圓山　同所にあり

辨財天祠　赤羽門の内蓮池の中島にあり本尊ハ智證大師の作なり右大将頼朝卿護念の法花堂に安置ありし星霜を経て後観智國師感得ありて當寺宝庫に納めありしを貞享二年生誉靈玄上人此所に一宇を建て一山の鎮守とあかめしむ宝珠院別當より中島を芙蓉洲と号く此所門より外ハ赤羽にして品川への街道なり

子聖権現社　山下谷にあり清林院別當に

産千代稲荷　観智院にあり昔ハ普光院と号きとなり當寺ハ合遷社

阿加牟堂　明誉檀通上人の旧跡なりといへり　東の大門の通り常照院にあり常念佛の道場なり

大門　東に向へ當山の總門なり外に下馬札を建らる

御成門　北の方馬場に相對す此所にも下馬札あり

涅槃門　切通の上にあり憲照院に涅槃像あるゆゑなるべし

栅門　山下谷より赤羽へ出る所また赤羽門ともいふ

當寺旧古を貝塚の地にありて光明寺と称せし真言瑜伽の密場にして　後小松院の御願に依て草創ありし

古刹なりしに至徳二年酉誉上人移て住せるの後竟に了誉上人　傳通院三ヶ月の上人のことなり　の徳化に帰し寺を改めて三縁山増上寺と號し宗風を轉して浄刹とれ　事跡合考にのせる三縁山歴代系譜に云く當寺草創之地者貝塚今糀町邊中頃移于日比谷邊後慶長初移于芝云く日比谷より芝へ移てしハ慶長三年戊戌八月なり武徳編年集成に慶長三年戊戌天正十八年辛卯平川口へ移されし増上寺を芝の地にうつすとあり平川日比谷古へ地を接きたれ混しそいへる

東照大神君天正十八年始て江戸の大城に入らせたまひし州民鼓腹し老幼相携て道路に拝迎し奉る幸に寺門の前路を通御あるによりて観智國師も是を拝せんとして出て寺前にあり　是則比々谷の地にありしそのかみ　時に師の道貌雄毅尋常ならざるを見そなはしめひ其名を問せられ乃寺に入て憩ひ其後當寺を以て植福の地となしたまひ永く師檀の御契約あり御崇敬あつく屢師を営中に請せられ法要を聴受なしたまひ待遇殊にし是を親王に比せられ師をして乗輿して殿階に昇ることを得せしめ以て永式とす今に至て時に寺境隘狭にして歴代の住持咸この累をうく

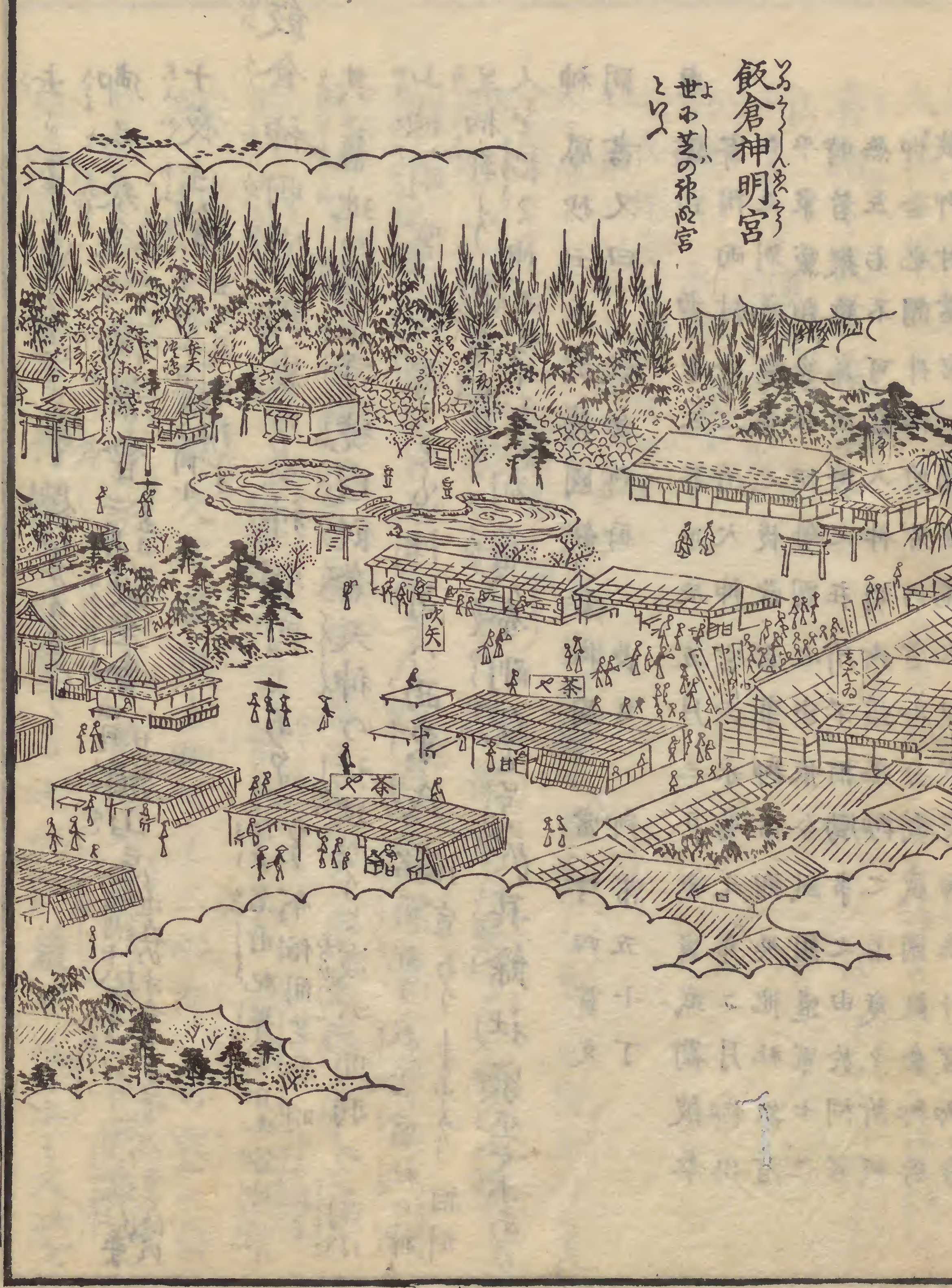
大城に接近そ是乃比々谷に依る今の地に移さる大に資財を
喜捨し殿堂房室に至るまて悉く営建しまひ最宏壮の大梵
刹となる 事跡合考に慶長十年乙巳本堂回廊等の造営ありて大伽藍となすと云く 於是浄家の宗教一時に
勃興し念佛の聲天下に洋々たり 以上浄宗護國篇ニ出ス 慶長十年一朝門前の老翁師に謂て云く
今夜祥夢を感せり師微笑して云く作其夢を鬻け吾買んとて青銅二十
疋を與ふ既にして翁云く増上寺軒端の雨木繁るらん師曰く吉徴なり慎て
人に語ることなかれと果して翌日伽藍営役の命ありて竟に宏構鉅材天下に
壮観となれる由浄土高僧傳に出たり
抑當山ハ関東浄刹の冠首にして龍象の聚る所實に靈山
會上布金紺園にも比すへく数百戸の学寮ハ疊々として
軒端を輾り支院ハ三十餘宇靡々として甍を連ねる三千
餘の大衆ハ常にこゝに集る中にも能化ハ一代の法蔵を胸間に
貯へ所化ハ十二の教文を眼裡に晒せり三心即一の窓の前
にハ五念四修の月を弄ひ事理倶頓の林の中にハ実報受
用の花を詠す佛閣の荘麗なる七宝荘嚴の浄土も又此を

去る事遠からすとを思ハしむる
御忌参 正月廿五日 涅槃會 二月十五日 誕生會 四月八日 開山忌 七月十八日ニ修行す一山惣出仕并ニ近在の末寺より出て大法會を修す
十夜法會 十月六日より同十五日迄修行す

飯倉神明宮 同東の方神明町にあり 江戸名所記等に日比谷神明とあり今俗間芝神明と称す
其舊地ハ増上寺境内飯倉天神の社地なりと或云赤羽の南小
山神明宮の地なりとも 社司ハ西東氏 名所記に往古當社の神宣ありしより 相州
足柄郡より齊藤氏なる人を招きて神主とすと云く別當ハ金剛院と号す其餘社家巫女等あり

神鳳抄云 武蔵國飯倉御厨 當時四貫文
同書又曰 飯倉御厨 長日御幣五十丁

東鑑曰 壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉
寄附両村於二所大神宮去永暦元年二月御出
京之刻感霊夢之後當宮事御信仰異他社然者
平家黨類等在伊勢國之由依令風聞遣軍士之
時者縦雖為凶賊之在所不揖觸事之由於祠宮
無左右不可亂入神明御鎮座砌之旨度々所被
仰含也謂件両所者内宮御分武蔵國飯倉御厨
被仰付當宮一禰宜荒木田成長神主外宮御分


飯倉神明宮
世に芝の神明宮といふ

安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖爲
一品房奉行遣両通御寄進状下畧
寄進　伊勢皇太神宮御厨壹處
在武蔵國飯倉
右志者奉爲　朝家安　爲成就私願殊抽忠丹
寄進状如件
壽永三年五月三日
正四位下前右兵衛佐源朝臣

按に當社を飯倉神明宮と称し奉るハ旧飯倉の地にあるゆゑ称
あるなり其地ハ正に三縁山今の飯倉天満宮の社辺なり飯倉と云ハ往古
此地に伊勢太神宮の御厨ありし故に地名を飯倉と唱へ又伊勢の
神を齊ひまつるへし猶飯倉の条下に詳なり又東鑑に同年正月
武蔵國大河土の御厨を豊受太神宮の法領に寄附の事載あれハ一國の
内なりしこともありしなるへし

社記云人皇六十六代一條帝の寛弘二年乙巳九月十六日
伊勢皇太神宮を鎮座なし奉る其時神幣と大牙一枝此地に
天降る又此地の童女に神託
あり彼二種のしるしをあがめ此地に跡を
たれんとなり依て當社を営なすとぞ
其後建久四年癸丑右大将
頼朝卿下野國奈須野の原狩猟の時當社の神殿に寶劔

太好庵
神宮御祭禮
御門前
氏子中
深川三井親和書

九月十六日
飯倉神明宮祭礼
十一日ゟ廿一日迄
御門前
氏子中

一振を納め一千三百餘貫の美田を寄附ありし其頃繁昌の宮居たりしに遂に後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原北城主大森實頼を亡して後威を逞うせし頃是が為に神領を掠めらる依て宮社ハ霧に朽風に破れ奉祀の人もなく大に荒廃したりしを天正に至て四海昌平の御時忝くも台命によりて當社の廢れしを興し給ひ神領若干を附せられ又寛永十一年甲戌にいたりて神殿を修造なし給ひしより社頭舊観に復す依て神燈の光りハ赫くとして和光の月にあきらかへ利物の花にほさハ白ひ深くして神威昔に倍せり

當社の祭例ハ九月十六日なり同し十一日より廿一日に至るのころ参詣群集を商ひ物多きか中にも藤の花を画きたる檜割篭なよひハ土生姜殊に夥し故に世俗生姜市又生姜祭とも唱へたり江戸名所にちかしよ臼杵木鉢鮓菓物多しとあれど今ハ是を鬻くず檜割篭を俗にちぎと名つく又生姜を賣るハ尤之しきよりのすゆく其擬をさうす

宇田川橋 宇田川町の大通りを横切て流るゝ小溝に架せり

日比谷稲荷社
毎年初午祭ハ二日以前より源助町と芝口三丁目の境に假屋を補理ひ神輿ハ旅出ありて此辺の繁昌いふばかりなし

今ハ上に土を覆ふ故ふ橋の形を失を（宇田或ハ宇多に作る）小田原北條家の臣宇多川和泉守といへる人架せしと云伝ふ（小田原記に大永四年上杉修理大夫朝興北条氏綱に責らるゝ品川表にて戦を云条下に氏綱朝興を亡し首とも実験ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降参の者とも中つけ普請致さんところに沙汰もとあり東海道驛路鈴に長禄元年丁丑四月八日大田道灌江戸にうつる其後宇多川和泉守長清ハ品川の館に住とあり又元禄開板の江戸鹿子といへる草紙に昔此所へ宇田といふ刀を堕しける故ふ此名ありといへり證とするふたらず）

日比谷稲荷祠　芝口三丁目西の裏通りにあり（此所町市至て狭し故に土人目蔭町と字す）本山方北修驗寂静院別當にて萬治の頃藍屋五兵衛といへる者託宣に依て花洛藤森の稲荷を勧請なせしをいへり（日比谷昔ハ比々谷に作る小田原北条家の所領役帳にも比々谷に作て此地を大胡宮内少輔所領の中に加ふ）

烏森稲荷社　幸橋より二丁斗南の方酒井下野侯邸の北横通りにあり往古よりの鎮座といへとも年歴来由共に詳ならず（元禄開板の江戸鹿子といへる草紙に天慶年間藤原秀郷将門退治の時の勧請なりといへとも信としかたし）又如何ある故ありしや當社の神宝に古き鰐口一口を納む（表に元暦元甲辰年）

正月下河辺庄司行平建立と彫付てあり江戸名所記にしるす日比谷稲荷の条下に云く此宮地ハ借地なくありしに既に断絶におよぶへき頃稲荷の神宮守に告て古来より此燈挑なりとて鰯口をもとめ与へおくに宮守公へ訴へ此燈によつて宮居つゝかなしとあれハ當社のるすを誤あるへからす或人云く明暦の回禄に奇瑞ありしかハ其後社の辺除地となりとそ

社司山田氏ハ柳営御連歌の御連衆より別當ハ快長院と号しく本山方の修験なり祭禮毎年二月初午に執行れ幸橋御門に假屋を補理て神輿を移して参詣群集して賑ハへり

古河御所足利成氏願書一通當社に蔵す

稲荷大明神願書事
今度發向所願悉於成就者當社可遂修造願書
之状如件
亨德四年正月五日　　左兵衛督源朝臣　成氏判

藪小路

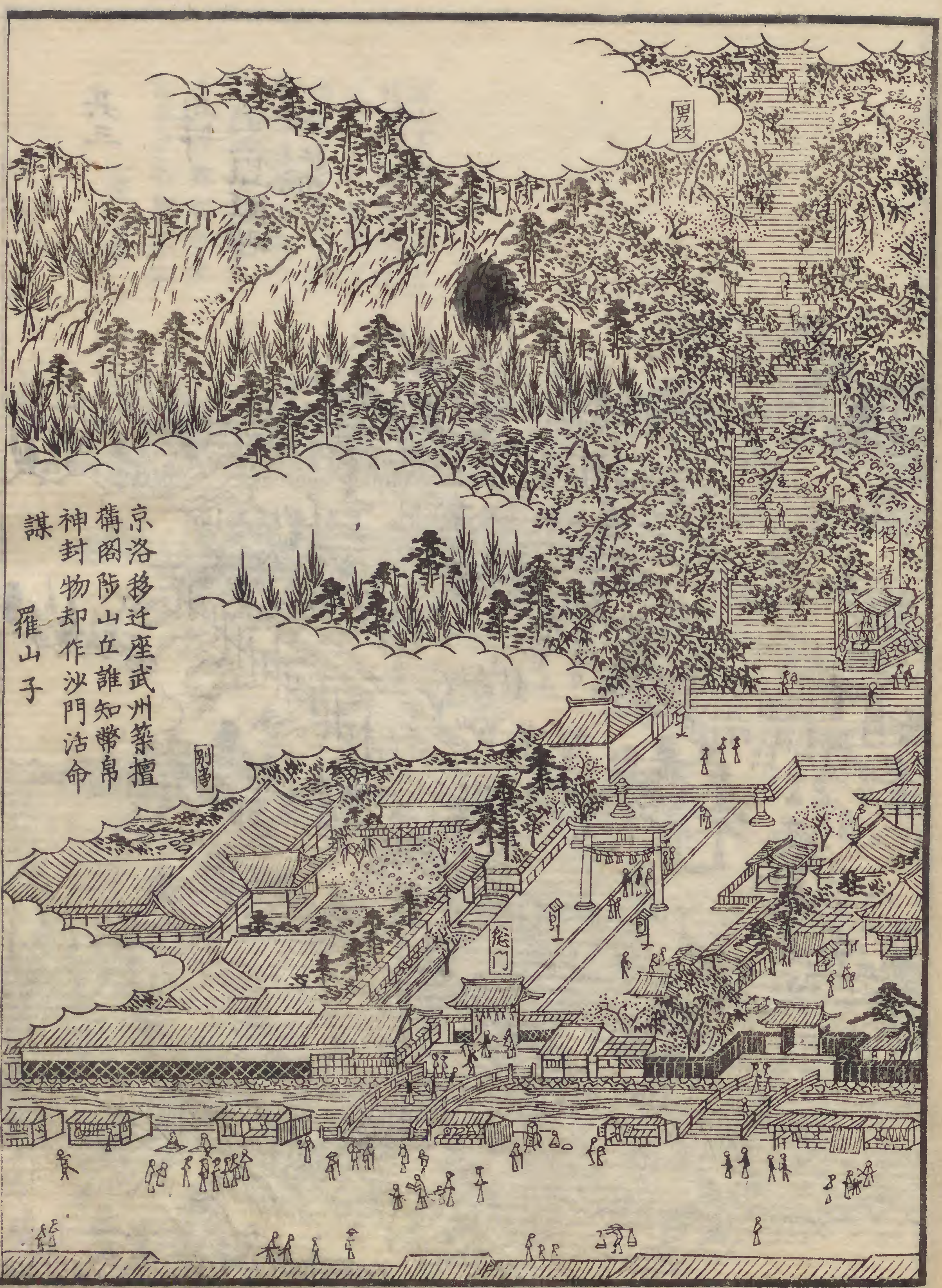
愛宕の下通り加藤侯の邸の北の通りを云同所艮の隈裏門の傍に少しもとハ竹叢ありし故にしかいへりされと其来由詳ならす傳説あれとも證とはなしかたし慶長より寛永の頃に至り細川三斎侯此地に住せられしその庭中の小池を三斎堀と号くといふ

櫻川　同所愛宕の麓を東南へ流るゝ溝川をいふ名く新著聞集に昔虎の門の辺より愛宕の辺迄悉く田畑にて畔に櫻樹幾株ともなくありし其中を流るゝ故櫻川といひしとあり　下流ハ宇田川橋の方へ流れ又三縁山に傍ふて金杉の川へ落合へり

摩尼珠山真福寺　櫻川の西岸に傍ひてあり新義の真言宗にして江戸四箇寺の一員知積院の觸頭なり當寺本尊薬師如来の霊像ハ弘法大師の作なりし慶長の頃甲州の領主浅野長政當寺中興照海上人をして自らの等身に薬師佛の像を手刻せしめ件の霊佛をハ其胎中に籠ませるといへり　毎月八日十二日ハ縁日にして參詣多し

愛宕山権現社　同南に並ぶ世俗城州愛宕山に同しといふも自ら別なり本地佛ハ勝軍地蔵尊にして行基大士の作なり永く火災を退けらるゝの守護神なり樓門の金剛力士ハ

愛宕社總門 其二



京洛移遷座武州築擅
構岡阤山立誰知幣帛
神封物却作沙門活命
謀
羅山子

其三

山上愛宕山権現本社図

宕山高倚勝軍宮
晴日登臨積水東
江樹千里連闕下
海雲一半傍城中
祇憐精衛仍含木
誰識鵾鯤忽擊風
羞殺魚鹽都會地
治生無似陶朱公

服元喬

運慶の作同二階の軒に掲し愛宕山の三字ハ智積院権大僧正の筆なり　別當圓福敎寺ハ石階の下にあり新義の真言宗江戸の觸頭四箇寺の随一なり開山を神證上人と號し二世俊賀上人といふ（四箇寺とハ湯島根生院本所弥勒寺當所真福寺並に當寺をいふ）

神證上人字を春音といひ後あらためて春香と号ス下野の人なり姓ハ塩谷氏母ハ皆川氏なり元和五年鈞命に依て金剛院に退居せらる今ハ天和年を経て春音の坊ハ遍照院と号を今の圓福寺是なり金剛院普賢院満蔵院鏡照院寿桂院等あまたく六院あり俊賀上人字ハ圓精と号ス野州西方邑の人姓ハ越路氏なり宇都宮弥三郎頼綱の後裔父ハ伊勢守近律神祠に祈りて産す其始下妻の圓福寺に住ス然るに其頃下総結城の元寺上州松井田秀峯等一世の豪俊なりしく俊賀上人をあハせて新義の三傑と称せらる元和五年俊賀上人愛宕権現の別當に命ぜられ共に圓福寺の号をうつして一宇を闢き永く大法幢を樹大法鼓を撃夏冬に廃することなし終に檀林職となる学徒業とし雲の如く聚て川の如く起る実に江城檀林の権輿なり

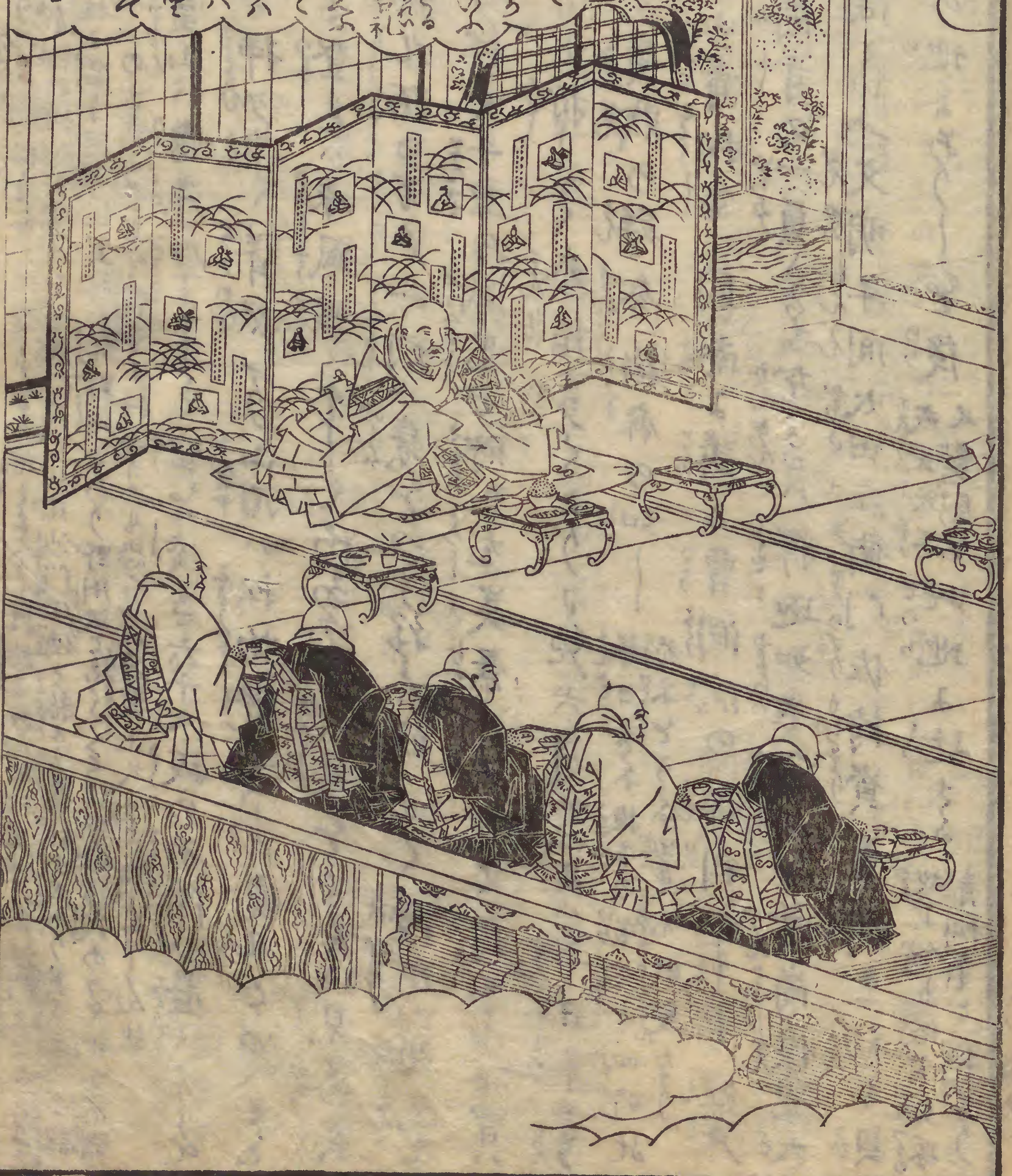
縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信楽の辺に化の時當社の本地将軍地蔵尊の像を彫刻しあひ後安部内親王に奉る（第四十六代孝謙天皇の御事なり）親王則彼地に宝祠を営みて是を安置かしあふ（其旧跡をも今宮村と名づく）然るに天正十年壬午の夏台棋泉州を發しあひ大和路よりも宇治を経て江州信楽に入せ賜ふ此時多羅尾四郎右衛門といへる者の宅に舎らせられし頃あるし此像を献ず（多羅尾家譜にいふ左京進光俊初て多羅尾と号ス其子常陸介綱知三好若江の三人衆とりて其子四郎兵衛光綱江州信楽を領ずと云多羅尾八四郎左衛門にあらず四郎兵衛光綱入道道賀のすなるべし）其節同國磯尾村の沙門神澄といふを供せられ此霊像を持して東國に赴かせ賜ふよりありし御出陣毎に神澄をして此勝軍地蔵尊を祈念せしめられ遂に慶長八年癸卯の夏台命によりて同庚子年石川六郎左衛門尉當山を闢き假に堂宇を造建しあひ其後同十五年庚戌本社を始悉く御建立ある元和三年丁巳同國豊島郡王子邑に於て百石の社領を附しあふとかや

（惣鹿子といへる冊子は此地ハ元桜田の村民内藤六郎といへる人の宅地なりしを沙門春音慶長庚子の御出陣に勝軍の法を修せし地ゆへに後に征伐ありしにより當社を御建立ありしと云又同書慶長八年九月廿四日貴賤の参詣を許さるとあり江戸名勝志同名所にあり考ずるに始山城の愛宕を遠州鳴子坂に勧請し夫より駿州宇津屋に移し後又爰に安置す慶長の頃本多美濃守の家臣都築某といへる人の勧請なり）

愛宕山円福寺毘沙門の使ハ毎歳正月
三日ニ修行ス女坂の上愛宕やといへる
茗肆のあるじ旧例にてこれを勤む
この日寺主を始とし支院よりも
出頭して其次第により座を儲け
強飯を饗じ半ニ至る頃此毘沙門
の使と称する者麻上下を着し
長き太刀を佩雷槌を差添又
大なる飯がひを杖ニ突初春の
飾り物にて兜を造り是を冠る
相随ふもの三人共ニ本殿より
男坂を下り円福寺
ニ入て此席ニ至り
俎机をひかへて行
飯台をのせて三度
魚板をつきならして曰

まかり出たる
者ハ毘沙門天の
御使院家役者
をはじめ寺中の
面々長屋の
所化ども勝手の

諸役人ニ
至る迄
新発意ハ
九杯古
参ハ七杯
御飲なされ
まし
おのゝや
らんふ
よつてハ此
杓子を以て
やまと縄さらう
返答ハいらんとの事
時其一臈なる
りの答て曰吉礼
のかへりまかるとふ
まるそはへと
云ふ志らぬハ
毘沙門の使ハ
平伏してそ堂
あるといひそ
本座へ
立帰る



とあり此説圓福寺に云傳ふるゆゑなく澄とも人々ころ按るに此山の地主神ハ毘沙門天なりとて今も本社の相殿に安置を無歳正月三日毘沙門の使と称する舊祀の式あり其式画上に詳なり按に當寺開山俊賀師ハ始野州にあり野州辺にとくくその強飯の式ありて世に所謂日光の古式に准らへて當寺に行ふものも恐らくハ俊賀上人より始るなるへん歟

當山ハ懸岸壁立して空を凌き六十八級の石階ハ疊々として雲を挿ぐめく聳然たり山頂ハ松柏鬱茂し夏日といへとも爰に登れハ涼風凛々としてたちまち炎暑をわするる見落せハ三條九陌の万戸千門ハ甍をつらね所せく海水ハ渺焉としてけしく千里の風光を貯へ尤美景の地なり毎月廿四日ハ縁日と称して参詣多くとりわけ六月廿四日ハ千日参と号けて貴賤の群参稲麻の如し（縁日ごとに植木の市立て四時花木をうりて賑ハし壮観なり）

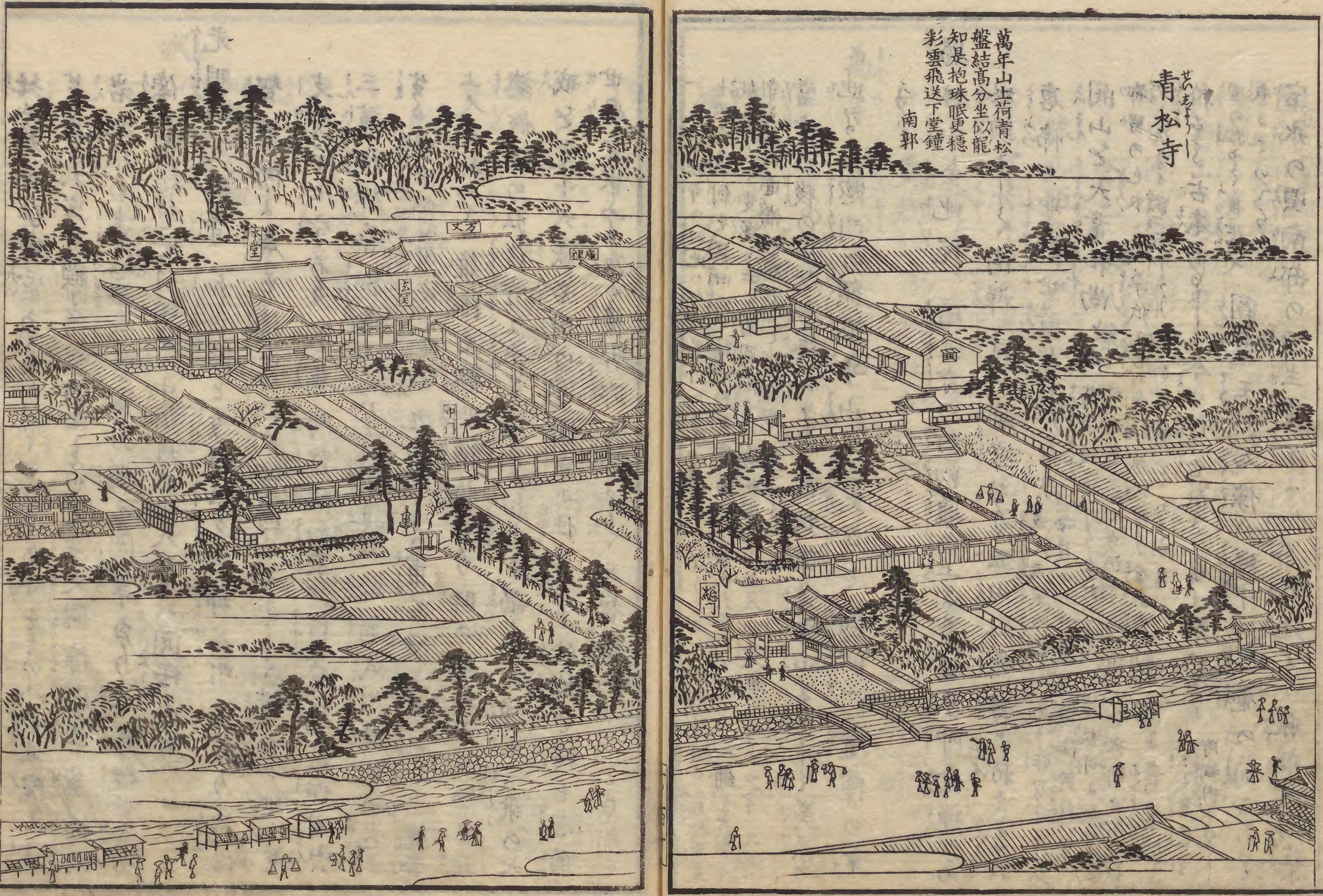
萬年山青松寺　同南に隣る曹洞派の禅刹にして江戸三箇寺の一員なり本尊ハ釋迦如来開山ハ雲崗俊徳大和尚といふ文明年間太田左衛門佐持資草創ありて初め貝塚の地にありしを後（或云天正又慶長とも）此地に遷さる（故に今も俗に貝塚青松寺と称せり）

一に青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云々南向亭云く青松甲斐と云人草創を其旧趾ハ糀町の貝塚當時玉虫八左衛門とよへる屋舗にありしく彼墓と甲斐塚と云と菊岡沾涼ハ青松宮内と云人の建立なりといへり又當寺ハ太田道灌の塚ありといへと詳ならず

當寺の後の山を含海山と号く眺望愛宕山に等しく美景の地なり惣門の額万年山の三大字ハ閣沙門道霈の筆なりとそ

勝林山金地院　増上寺の西切通の上にあり京師南禅寺の塔頭にして南禅寺ハ宿寺なり五山の僧録と称せり本尊ハ唐佛の聖観世音菩薩なり（或人云宋人陳和卿か作なりといふ）毎月十八日観音懺法修行す

開山を大業和尚と云（其頃碩学なりしかハ五山の僧禄司に命せられ都留の毛衣と云草紙に古ハ寺社の評定衆に加へまひ寺社の訴へを決断せしむ是よりひろく寛永中より武家の職と定め裁許のはし金地院と云く）境内に青葉楓と称せる古木ありしか今ハ焼亡ひてなしといへり（此木も昔當寺御城内にありし頃の物ゆへ後此地へ移し栽るといへり）閻魔王並石像ハ塔中二玄庵の前にあり宝永の頃南部の領主霊亦に依て彼地より麻布の別荘に



青松寺（せいしょうじ）

萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭

遷され再ひ威霊あるにより又こゝに安置して金地院と書し

せし三大字の額ハ水雲写とあり方丈同澤溟筆薦福殿

岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆なり本尊観世音の

像ハ大の月三月續ける中の月の十八日にハ開帳あり

光明山天徳寺　和合院と号す西久保神谷町にあり花洛

智恩院に属す浄家江戸四箇の一にして紫衣の地なり

支院十七宇あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開山ハ

三蓮社縁誉称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑に

生る（父ハ藤田左衛門尉道昭と云母ハ冨永氏或ハ云冨田氏）九歳にして甫て増上寺第七世親誉

上人に従つて薙染す聰明絶倫なり師の遷化に及ひて北

總飯沼の弘経寺に至て鎮誉和尚に謁して浄土一乗の大

戒を受十六歳岩附の浄國寺に住し大に法輪を轉す志猶

世塵を厭ふ故に後古郷に帰りて天智庵（知或ハ又地に作る）を草創す

今の天徳寺是なり（天文二年の草創といふ先師親誉を以て開山祖とし自ハ二世に居る舊地ハ西丸御城の邊なりしとなん）

師弥遁世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひて洛の知恩院に

至て傍に一精舎を建て住す是を一心院と号す（一心院ハ念佛三昧の一本寺也）

昼夜不退に常行念佛を修し新に念佛三昧の法則を製

し永世の標準とせり今諸國厭悠の道場此法式を以て定矩

とす（花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院桂の極樂寺田井の會念寺淀の念佛寺等を草創ありすへて此ともに不断念仏の道場とす）

天文廿三年の秋一心院に寂を實す七月十九日なり

化壽四十一と見えし（今世間用ゆる所の二連數珠も師の製する所なり是を貫輪といふ佛号を唱ふるの徒此念珠を用ひ）

城山

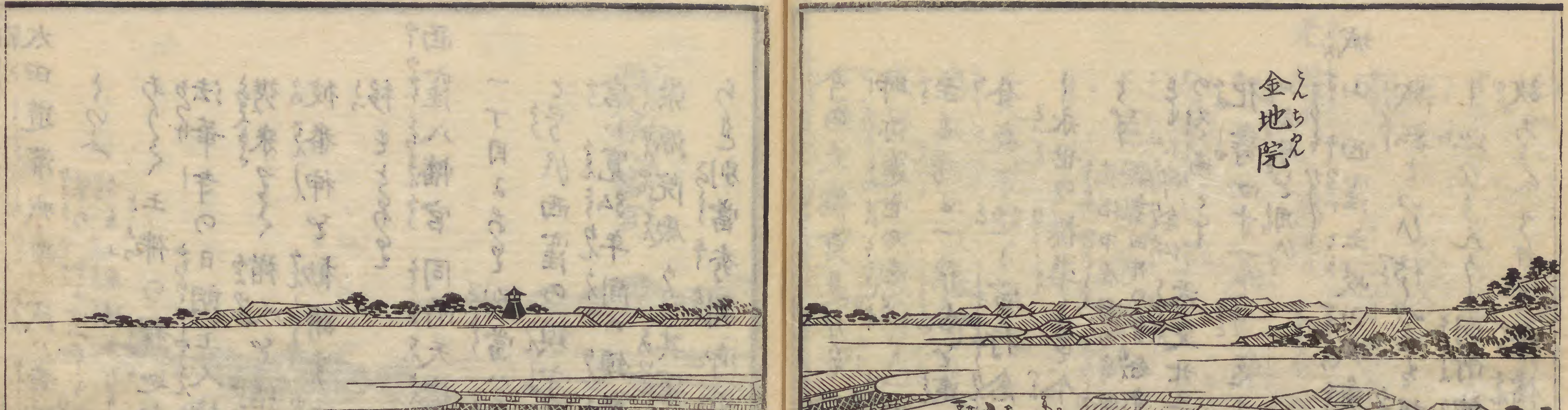
城山　西窪土岐山城侯の藩邸の辺を云土俗熊谷次郎直實の

城趾といひ傳ふるは誤なるへし昔熊谷氏の人此居宅ありし

し地なりしかハ同所神谷町にかゝる所の石橋を熊谷橋と号るも

故あるへしされと今傳説詳ならす

（菊岡沾凉云此所ハ昔麻布殿とやの出丸の地なりしと云）


金地院（こんちゐん）
方丈
本堂

太田道灌城跡 或ハ番神山とも号ス西窪仙石家第宅の地なりといふ（紫の一本にいふも太田道灌取立し城地なり今ハ土取場となりしを堀崩せしと云く）又昔此地に小堂ありて土佛の釋迦を安置し法華堂と号く後豆州玉澤法華寺の日朗上人持念せる所の墨画の三十番神の画影を携来りて諸人を結縁せ然るに小田原北条氏後に社を建て彼番神を勧請す故に番神山といふ其画像ハ後京師に移せりとあり

西窪八幡宮 同所天德寺裏門より南の方三町程飯倉町一丁目にあり別當ハ天台宗にして東叡山の末八幡山普門院と号す西窪の鎮守にして旅所ハ小山にあり相傳ふ當社八幡宮ハ寛弘年間の鎮座なりといへり慶長五年関原御一戦の時崇源院殿より其軍御勝利と御安全との御願書をまゐらせ別當秀圓御祈禱修行ありしとて其奇特ありしかハ

西久保八幡宮

飯倉熊野権現社

寛永十一年甲戌二月終に宮社御建立ありしとぞ祭禮ハ
毎歳八月十五日なり

飯倉 西窪の南を云此地ハ往古伊勢太神宮の神厨の地にてあり
し故に其御饌料の稲を収めし倉を飯倉と唱へ則しか
地名に呼なるなるべし 永禄の頃小田原北条家の臣大草左近太夫此飯倉弾正忠太田新六郎島津孫四郎櫻田と領役帳にみえたり 又同書に飯倉の内
地と領せしよし北条家の所より 駒込吉祥寺に蔵まる
あるひハ往古飯倉の地の領主たりしなるべし
所の北条家人遠山左衛門大夫政景元亀二年江戸にて五十五貫六百八十五文
の地を彼寺に寄附せし状に飯倉の地名ありて此中三貫三百文ハ以前より
櫁輪大蔵の寄附せし地なりとあるハ猶前の芝神明宮の条下にも
神鳳抄東鑑等の書を引て擬らえす照合せられたへし

熊野権現宮 飯倉町にあり 或人云養老年間芝の海濱に
勧請ありしを遥の後今の地に移さるるとぞ 別当ハ三集山
正宮寺といふ天台宗にして東叡山に属せり 毎年六月朔日より三日まで祭礼を修行す

勝手が原 土器町より赤羽へ出る廣小路の辺をいふとぞ 昔ハ三田の
方へかけて廣寞の原野なりしかハ太田道灌江戸の城よりて

勢を出す時ハ此所にて人数を揃へまうけしとなり

赤羽川 渋谷川の下流なり新堀と号く 延宝江戸図に麻布新堀とあり元禄開板
の江戸鹿子といへる艸紙に元禄の始釣命によつて是を堀らしむ
此河の上下赤羽の池と云ありと云 江戸名勝志に溝口信濃守伊達美作守
たまへとありしも の両侯承りしとあり

赤羽橋 同し流に架を按に赤羽ハ赤埴の転したるなるらん歟
此辺茶店多く河原の北にて毎朝肴市立て繁昌の地なり

心光院 同所橋より北の河原道より右にあり増上寺の別
院にして宝暦の頃縁山より此地に移さる 其旧地ハ涅槃門当の辺なりと云
寺ハ鎮西上人の古蹟にして常行念仏の道場なり恵照
律院光阿上人開基とす 光阿上人ハ横連社継誉心岩頑夢と号す
加州小松の人姓ハ加波氏越前浄光院の随
流に投して剃染し頓に嗣法を宝永三年乙卯八月晦日当寺に於て寂す由伝燈
録図にみえたり加州大日寺及ひ当寺并恵照院等を開基し不断念仏の道場を創む

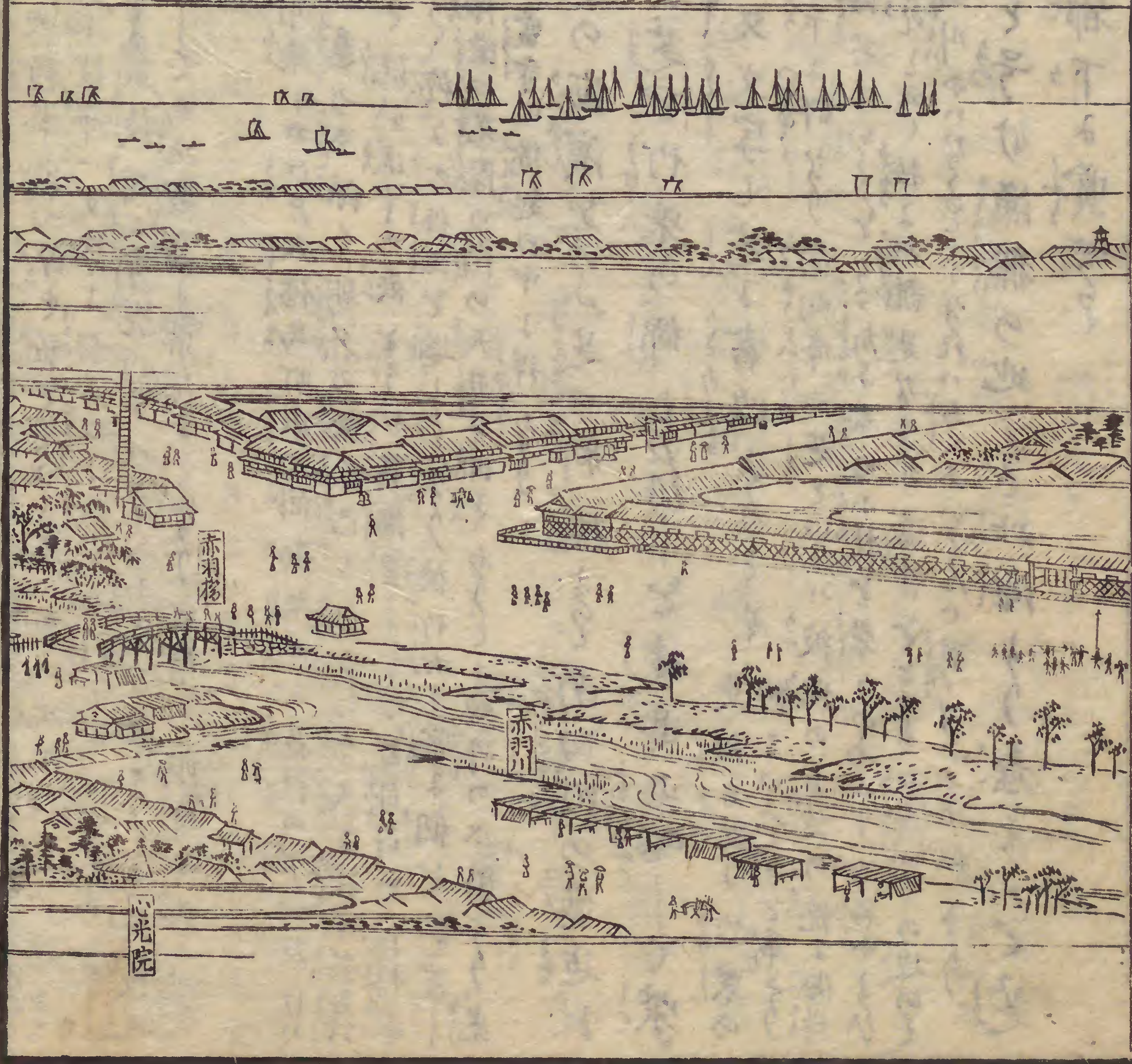
布引観世音菩薩 境内に安せり本尊ハ馬頭観音にして増上寺の役者文同
代々之を奉持せるとそ 慶長の頃丹羽五郎左衛門尉
長重奥州二本松に在国の時ある日城下に出しに熊野道者の馬に乗
其馬駿足なりけれハ農人にしかへ長重これを試るに実に名馬なりけれハ則名を

道者と唱ふ後に 大将軍家へ献せんと駈を追せけるに布一端を後輪の盗手
両方にむすひ附けるに彼布一文字に翻る故に改て布引と命せられ愛し
めしつかはれしか彼馬斃たる後増上寺境内に埋めて石塔を建られし其後又
件の石塔を本尊として馬頭観音に崇めるとなり宝暦の頃寺と共に此地へ
引れけりし
とそ

竹女水盤 新著聞集に云 江戸大伝馬町佐久間勘解由か召仕の下女たけハ
天性仁慈の志深く朝夕の飯米己か分ハ乞丐人に施し其身ハ
水盤の角に網を置て洗ひ流しの飯をうけ其溜りしものを自らの食料とせ
常に称名怠る事なく終に大往生を遂しとなり彼竹女か常に網をあて置し
水盤ハ今増上寺念仏堂心光院の門の天井に掛てありとなむ件の水盤より光
明を放ちけりとすハ当寺の縁起の中に詳なり

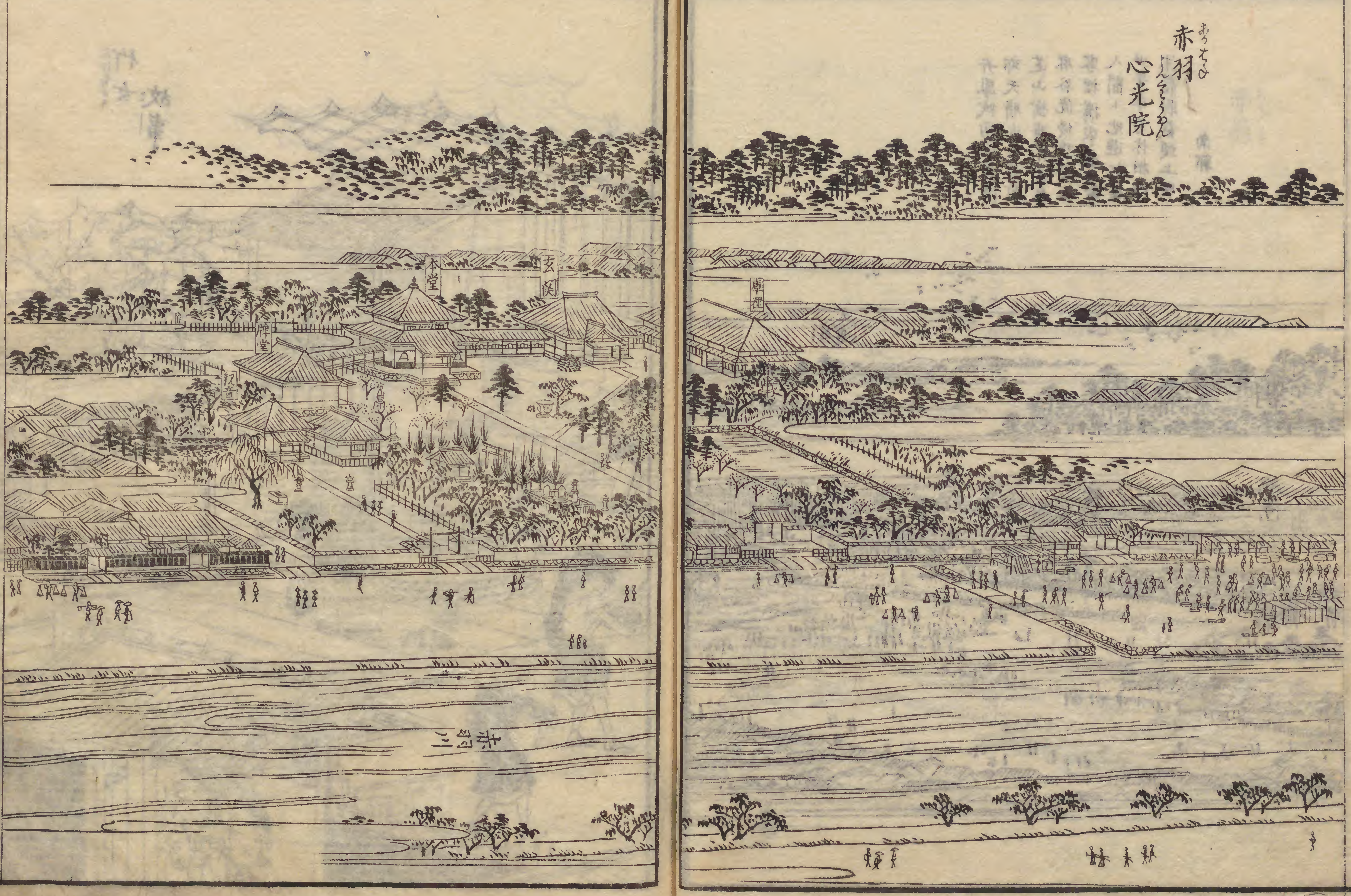
芝浦 本芝町の東の海浜をいふ芝口新橋より南田町の辺迄此
惣名なり上古ハ芝を竹柴の郷といひしを後世上略して柴
とのミ呼来りしを又文字も芝に書改めけりとそ 更級日記に竹柴の郷といへるを挙けり
猶三田済海寺の条下に詳なり南向亭云芝といふハ彼地の古老の説に海岸
近き所に柴を建海苔のかゝるをとるゆへ木の小枝を柴といへり地名によひ
しか後芝に改作るものと云く按に此説是なりす海苔をとるは元浅草の辺のミ
にて昔ハ今のことく品川にハなかりしなれハ古へにいそんハ附会なるに似たり
此地を雑魚場と号け漁猟の地なり此海より産するを芝
肴と称して都下に賞せり

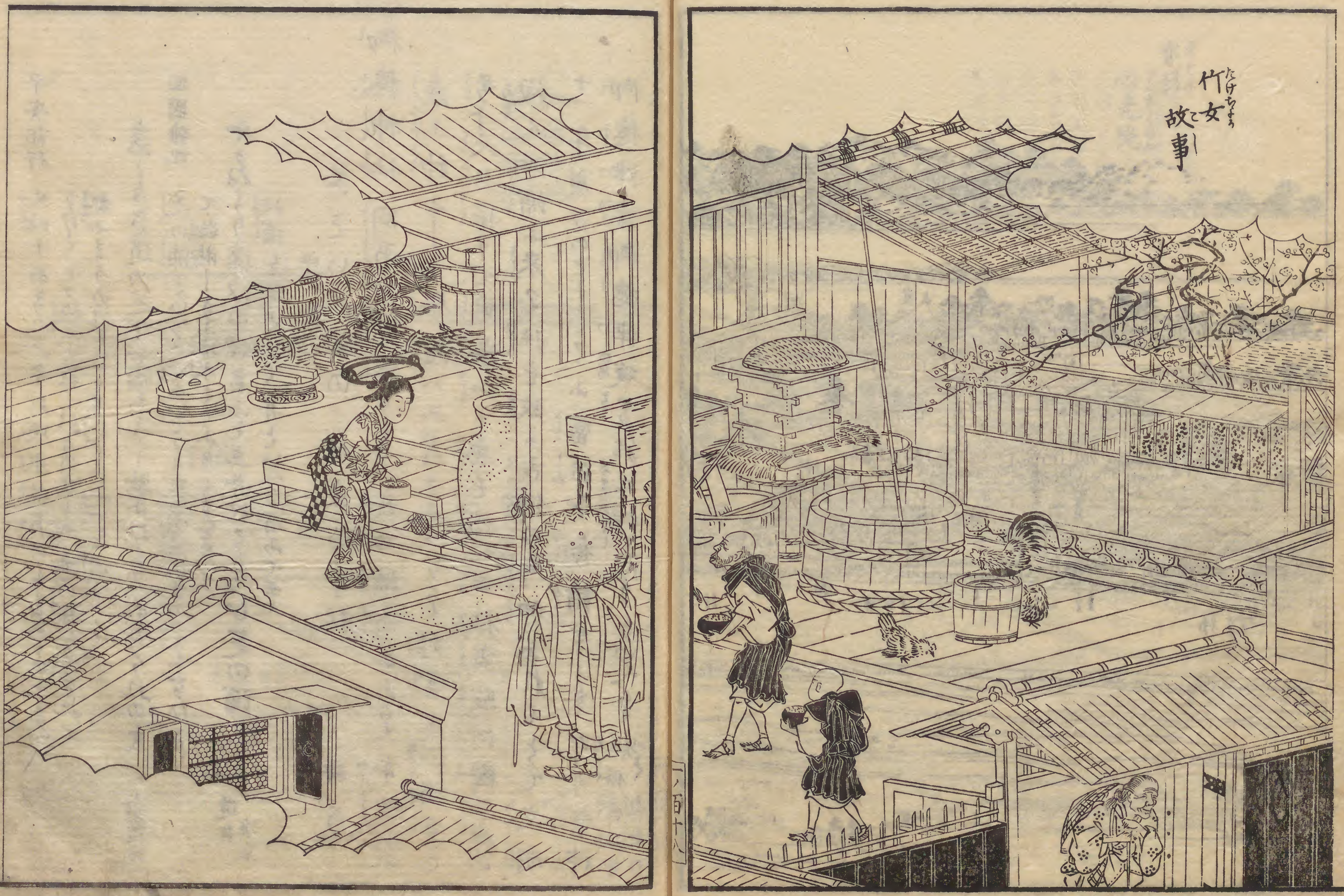
赤羽（あかばね）



丹鳳城南赤羽濵、
郊天晴近五雲新
芝山樹擁銀臺色
麻谷流侵碧海春
客裡攜家羞白髮
人間卜地避紅塵
少年車馬休相汚
沐罷聊裁頭上巾

南郭


赤羽(あかばね) 心光院(しんくわうゐん)
本堂
玄関
禅堂
観音
庫裡
赤羽川



国立公文書館
National Archives of Japan

平安記行 文明十あまり二年の頃水無月のなかはあつさ土さへさけてとう旅人のやすらひのせし避暑の床をもとめて都にまうのぼりね 中略 芝といふ所を過るとて

露しげき道の芝生を踏ちらし駒に任するあきくれのそら　太田道灌

田園雑記 芝の浦といへる所にいたりぬれハ塩屋のけふりうちなびきて物淋しきに塩木をつむ舟ともを見て

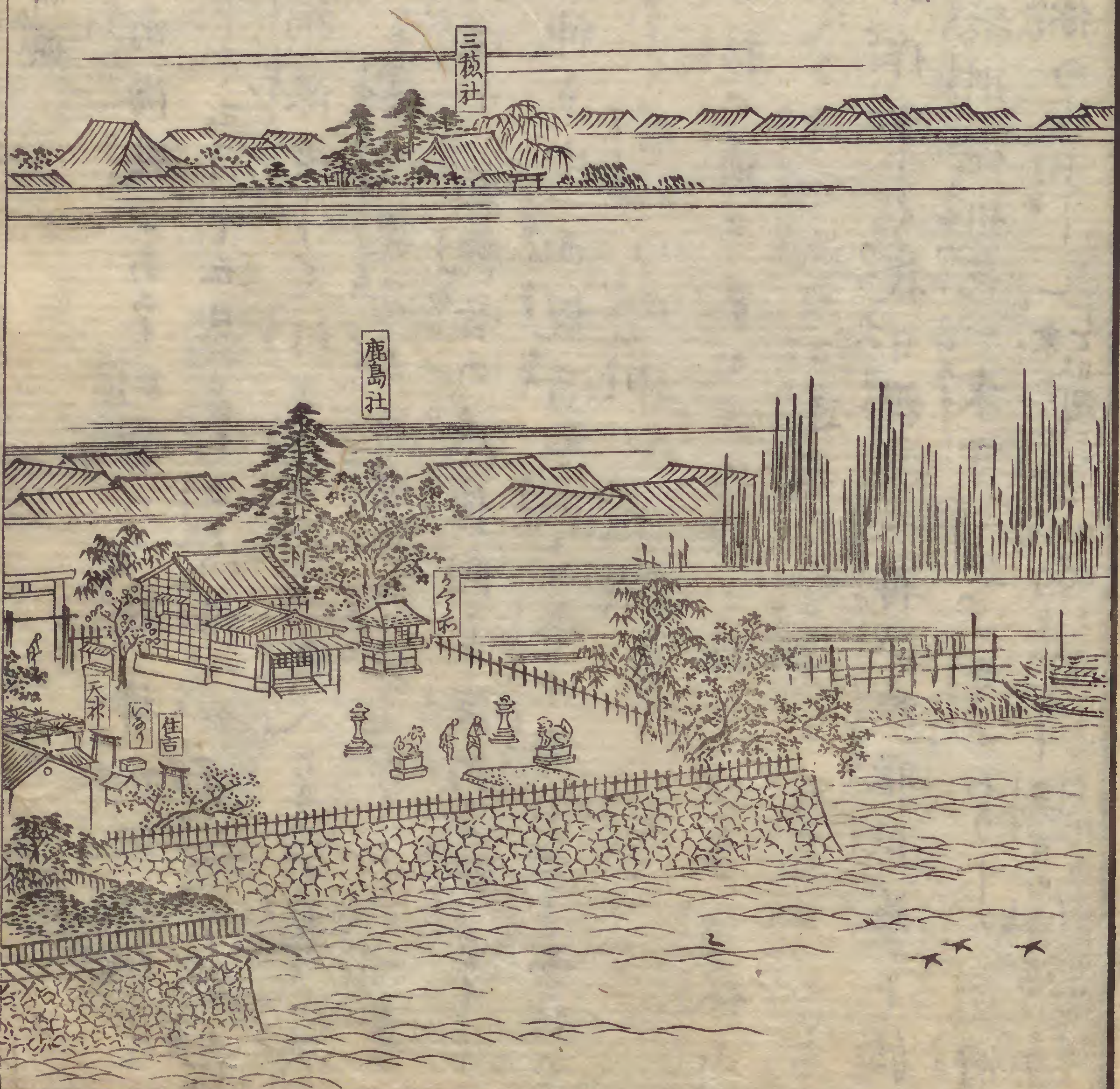
やくねより藻汐の煙名にそ立舟にこりつむ芝の浦人　道興准后

此浦を過ぐるあら井といへる所にて云く

江戸にて

芝といへるその候夏さし比　梅翁

御穂神社 同所本芝通りより西の横町にあり 本芝の産土神なり 祭禮ハ三月十五日なり 別當ハ正福寺と号す天台宗にて東叡山に属せり 傳へ云 往古駿河國三穂の海人此浦に来り住む故に古郷の御神をうつせりとて 文明十一年庚子のとし こゝに當社を勧請せしなりといへり 祭神ハ 御穂津彦 御穂津媛 の二神なりといへり 土俗當社を疱瘡の



御穂神社
鹿嶋神社

守護神として祈願するもの多し

鹿島神社 同所海濱にあり別當ハ御穂神社に相同し祭禮も又同しく三月十五日なり土人傳へ云寛永年間此浦に一の小祠漂流して汀に止るあり漁人これを揚て其本所を尋るに常州鹿島大神宮の社地よりわかれし小祠なりけるよし又其頃十一面觀音の木像同し海汀に流よりしかれハ今ハ鹿島明神も十一面觀音をもて本地佛とせしとなり是によりて當社の御神を勧請せしとなり

毘沙門堂 金杉の通り東の方の横小路にあり松林山正傳寺といへる中山派の日蓮宗の寺境にありて本尊ハ傳教大師の作なりとて後日親上人再ひ點眼供養ありしとぞ往古ハ摂州堤折邑一乗寺といへる寺にありしかとも僻地ゆゑに結縁の人少し

一乗寺ハ金仙寺といひし真言の密場なりしを日親上人の弘教に帰して本化の宗に改む

依て寛文の頃衆生化益の為日榮上人こゝに移し奉るといふ靈驗感應の著しきこと寺記に詳なり故に参詣の貴賤日々に多く寅日を殊に群集せり 正月初の寅日参詣の人大方ハ芝の神明宮の門前より燧石をとゝのへて帰る輩あり 洛北の鞍馬山の毘沙門天へ正月初の寅日詣する輩燧石を買ひて家土産とし是を春ごとの例とす これに準ずといへり

日親堂 日親上人の像を安んず 靈驗著し

田中山西應寺 金杉の通りより西の裏にあり 門前を西應寺町と唱ふ 浄土宗にして三縁山に属す 支院三宇あり 本尊阿弥陀如来の像ハ慧心僧都の作なりと云 傳ふ應安紀元戊申の年明賢上人草創を 明賢上人ハ應永五年戊寅黄鐘十日に遷化せり年八十六歳といへり 天正の頃大将軍家當寺に駕を枉させられ寺領御寄附ありしかハ学徒朝夕の助覚はしく学道盛なり 又當寺十六世存冏和尚一宗に碩学にして當時法門の龍象学道の麟鶴なり 台命によりて大将軍家深く崇敬ましくけるとなり

依て一夏の間法幢を建一百餘人の衆僧に宗風の法意を示をすゝめて念佛三昧他力往生のをしへ日々に大いに弘まり 古神領は寄られし地を御田と書る由古老の説なり

三田 或ハ御田及ひ箕多に作ると

和名類聚鈔云 荏原郡御田云云

武藏國風土記残篇云 荏原郡御田郷或箕多

公穀三百六十七束假粟百三十九丸貢松竹蔵[]

等亦有諸禽允大膳或木工寮云云

按に此地をも渡辺の綱が旧跡とするは誤なるへし 或人云此地ハ三田家の旧領にして三田氏累世こゝに居住せり 三田家譜に三田三河守其子駿河守綱勝武州三田に住せり 代々綱といふ字を名とせり 依て後人渡辺の綱に混し交へて誤まる歟と云々 渡辺系図に云 源次充武蔵國足立郡箕田郷に配せられしとありて三田とはかゝれず 三田箕田同訓なる故に混雑して附會の説をはなせりけるにや 鶯峯文集に箕田園の記と号するものありて此地を渡辺綱が旧跡とせり 其文にいふ所略せり 永禄二年小田原北条家の所領役帳に太田新六郎知行の内に三田内寺楽寺分同箕輪寺屋敷分又島津弥七郎知行三田坂間分及中村平次左衛門知行三田高福寺分本住坊寺領に同所ふくむ惣領分の地等を配すと見えたり

綱坂 同所松平隠岐侯と會津家との藩邸の間を寺町へ

下る坂を号く 惣鹿子に渡辺坂とあり菊岡沾涼云此所ハ箕田武蔵守の居城跡なりと 又同所有馬家の藩邸北南の坂を綱か手引坂と号く綱か産湯水と云ハ同所肥後侯の園中綱か駒繋松と称するハ隠岐侯の藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内にあり

按に窪三田に綱生山當光寺といへる一向派の寺あり渡辺の綱か出生の地なりといひ伝へ又三田八幡宮の神躰をも渡辺の綱か守護神なりとしすへて此辺綱に縁あるもの多し會津家の別荘にも綱か塚と称するものありて塚上の松を懐古松と号けられし鵞峯先生の箕田園の記を作る其畧に云く武蔵國荏原郡渋谷荘箕田邑ハ源綱か陳跡なり綱か老仕を乞し此所に終るの地なり已来数百の星霜を歴といへとも其塚猶存せり塚上に松を栽て遺跡を標せり則是壮氣いまた散せん千歳の餘情あることのみ明暦四戊戌の夏會津源公此地を賜ひ別荘とし其後塚を存するハ蓋その勇を取り古の士を尚ふるのみと云くかくの如く記されしかと此地ハ箕田にあらん猶前の三田の條下に詳なり照合せらるへし

小山神明宮 同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり神躰ハ雨寶童子別當ハ天台宗不動院と号く此所を飯倉神明宮の舊地とするハ誤なるを

小山神明宮

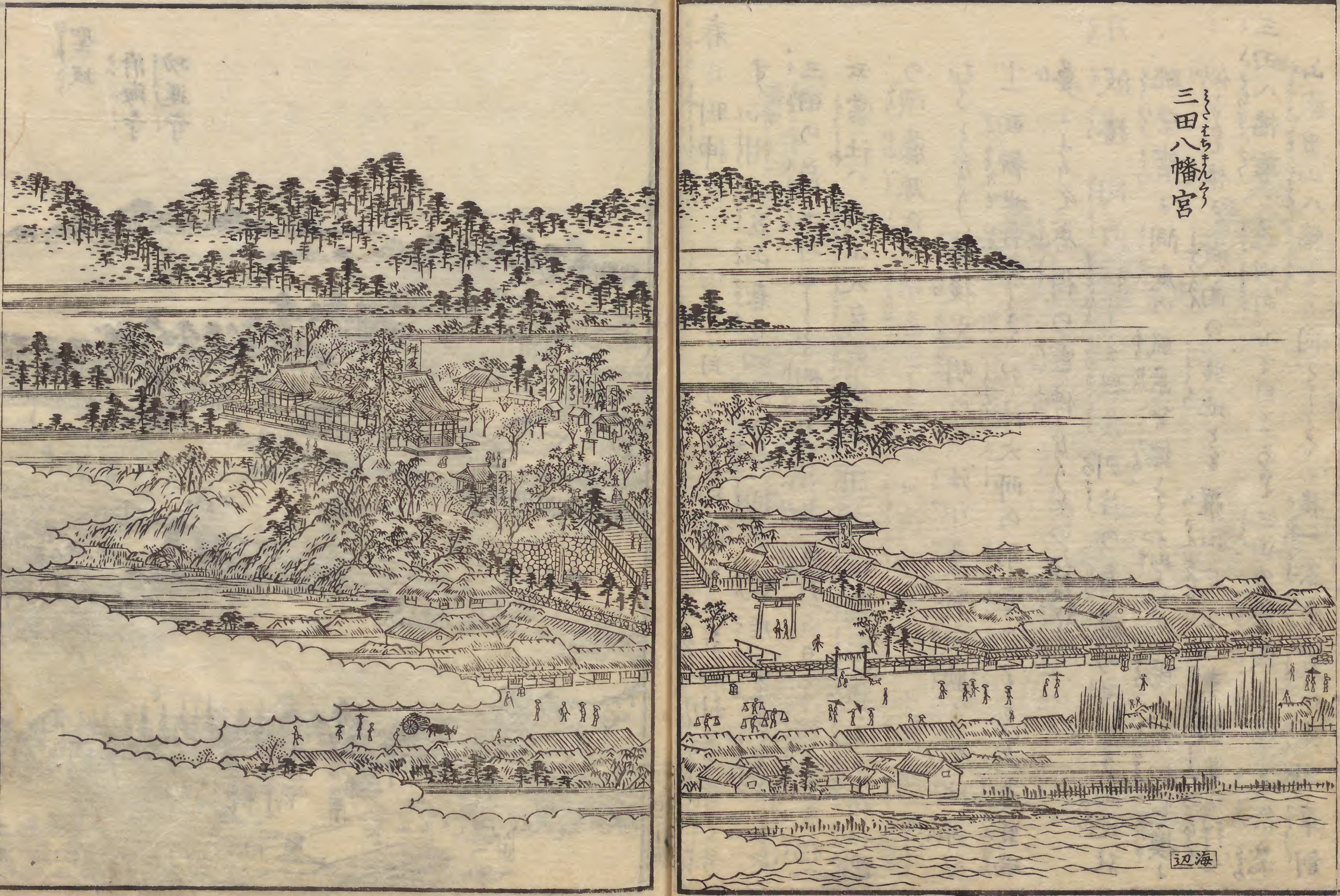
国立公文書館
National Archives of Japan

三田 春日明神社

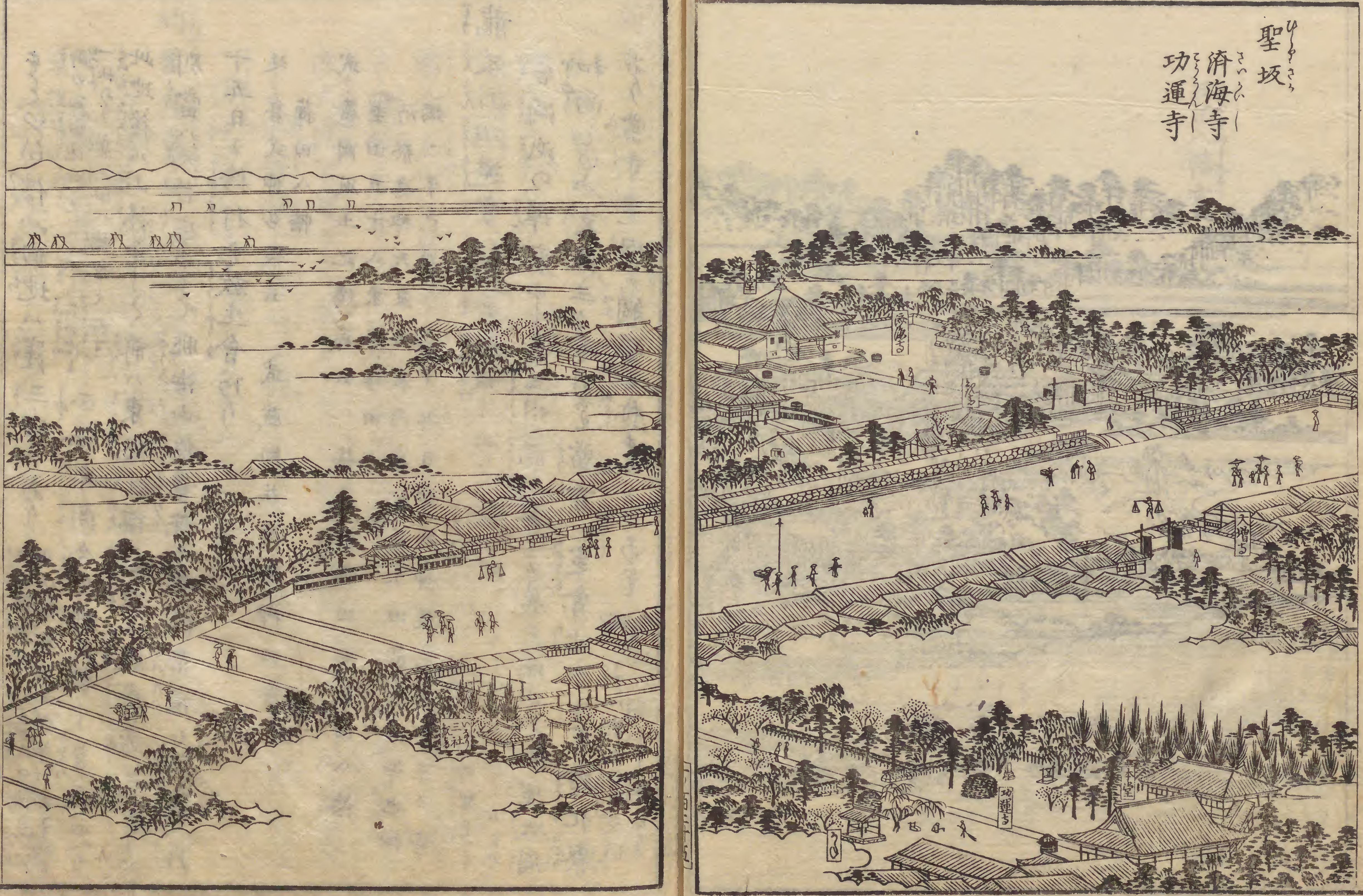
春日明神社　三田一丁目にあり別當を三笠山神宮寺と号す和州三笠山春日四所の御神を鎮座なし奉るとぞ三田の産土神にして例祭ハ毎年九月九日に修行を傳へ云當社ハ村上天皇天德年間武蔵國司藤原正房任國の頃藤原氏の宗廟なる故に此御神を此地に勧請せしむるとかや其後文明の頃法印慶賢中興も本地佛を十一面觀世音にして弘法大師の彫造なるといふ慶賢瑞夢によりて感得の靈佛なりといひ傳ふ

月波樓　同所松平主殿侯別荘の看樓の号なり此地北眺望實に洞庭の風景を縮るがごとく岳陽の大觀を摸に似るに依て城南の勝地とぞ羅山先生の東明集に詳之

三田八幡宮　芝田町七丁目にあり三田の惣鎮守にして祭る所山城男山八幡宮と同じく　後一条帝寛仁年間草創



国立公文書館
National Archives of Japan



聖坂(ひじりざか)
済海寺(さいかいじ)
功運寺(こううんじ)

もといひ傳ふ旧地ハ窪三田にあり所の葬田神社是なり今も其旧地に一社あり窪三田八幡宮と称す正保年間今の地へ移しまつるといへり土人云當社ハ延喜式の神名記及び武蔵風土記等の書に載る此地後ハ山林にして前ハ東海に臨む故に風光秀美なり別當ハ天台宗にして眺海山無量院と号く祭禮ハ隔年八月十五日に修行す放生會あり

延喜式神名帳云　武蔵國荏原郡御田郷

葬田八幡

武蔵國風土記残篇云　荏原郡御田郷稗田八幡

圭田五十八束三字田

所祭應神天皇也武内宿祢荒木田襲津彦等也和

銅二年己酉八月十五日始行神禮有神戸巫戸等

龍谷山功運寺　同所聖坂にあり聖坂とハむかし此地に高野聖多く住して開きたりし坂なれバかく云とぞ曹洞派の禪窟にして三州龍門寺に属す開山ハ黙室天周和尚といふ支院三ヶ寺あり當寺ハ定會地にして所化寮あり當寺境内に綱塚と称するものあり綱ハ前の三田及び綱坂の条下に詳なり

周光山濟海寺　聖坂の上道より左側にあり浄土宗にして京師智恩院に属す上古ハ竹柴寺と号して巍々たる真言の古刹なりしが中古荒廃に逮ぶ依て法誉上人念無和尚中興す其庭海岸に臨むゆへ沖より目當の燈籠あり當寺庭中の眺望ハ實に絶景なり房總の群山眼下にありて雅趣もつとも多し朝夕に漂ふ釣舟ハ沖に小く暮て數點の漁火波を焼かと疑ふ春ハ芳發して緑陰深く風露爽にして氷霜潔し四時に觀をあらためて風人の眼を凝しむる一勝地なり月の岬といふも此辺の惣名なり

竹柴寺舊址　濟海寺と同隣の土岐侯の邸地其舊跡なりといひ傳ふ山岡明阿云按に今の地ハ海辺にちかくして岡の上なれハ更級日記にいへる所にかなへりとも若ハ此寺にちかくありしハ昔ハ外にありしを後ハこの所へうつせしなるへしと云々

更級日記云

今ハ武蔵國になりぬ殊にをかしき所もみえず濱も砂子

白く波もなくこひちの様なく紫生と闇野も蘆荻のミ
高く生て馬に乗て弓をとる末見えぬまで高く生茂りて
中を分行に竹紫といふ寺あり遥にいさゝうといふ
所は樓の跡礎などあるをいかなる所ぞと問ハ是はいにしへ
竹紫といふさかなり國の人のありけるを火焚家の火
焚衛士にさし奉りたりけるに御前の庭を掃くとて
なぞや苦しきめをみるらん我國に七つ三つ造り
居たる酒壺にさし渡したるひたえの瓢の南風吹ハ
北に靡き北風吹ハ南になびき西吹ハ東に靡き東
吹ハ西になびくを見でかくてあるよと獨ごちつぶやき
けるを其時の帝の御むすめいみじうかしづかれま
しますが只獨り御簾の際に立出給ひて柱に寄かゝ
りて御覧ずるにこのをのこのかく獨ごちいふを

哀にいかなる瓢のいかに靡くならんといみじう床しく
おぼされければ御簾を押明てあのをのここちよれと
めしければかしこまりて高欄のつらに参りたりければ
云つる事今ひとかへり我にいひて聞せよと仰られければ
酒壺の事今ひとかへり申ければ我ゐていきて見せよ
さいふやうありと仰られければかしこく恐しと思ひ
けれどさるべきにやありけんおひ奉りて下るに
便なく人追來らんと思ひて其夜勢多の橋のもと
に此宮を居へまつりて瀬田の橋をひとまをこ
ほちて夫を飛越て此宮をかきおひ奉りて七日
七夜といふに武藏國にいきつきにけり帝后御子
うせ給ひぬとおぼしまどひもとめ給ふにむさしの
國の衛士のをのこなんいとかうばしきものを首に

竹柴寺（たけしばてら）の古事（こじ）

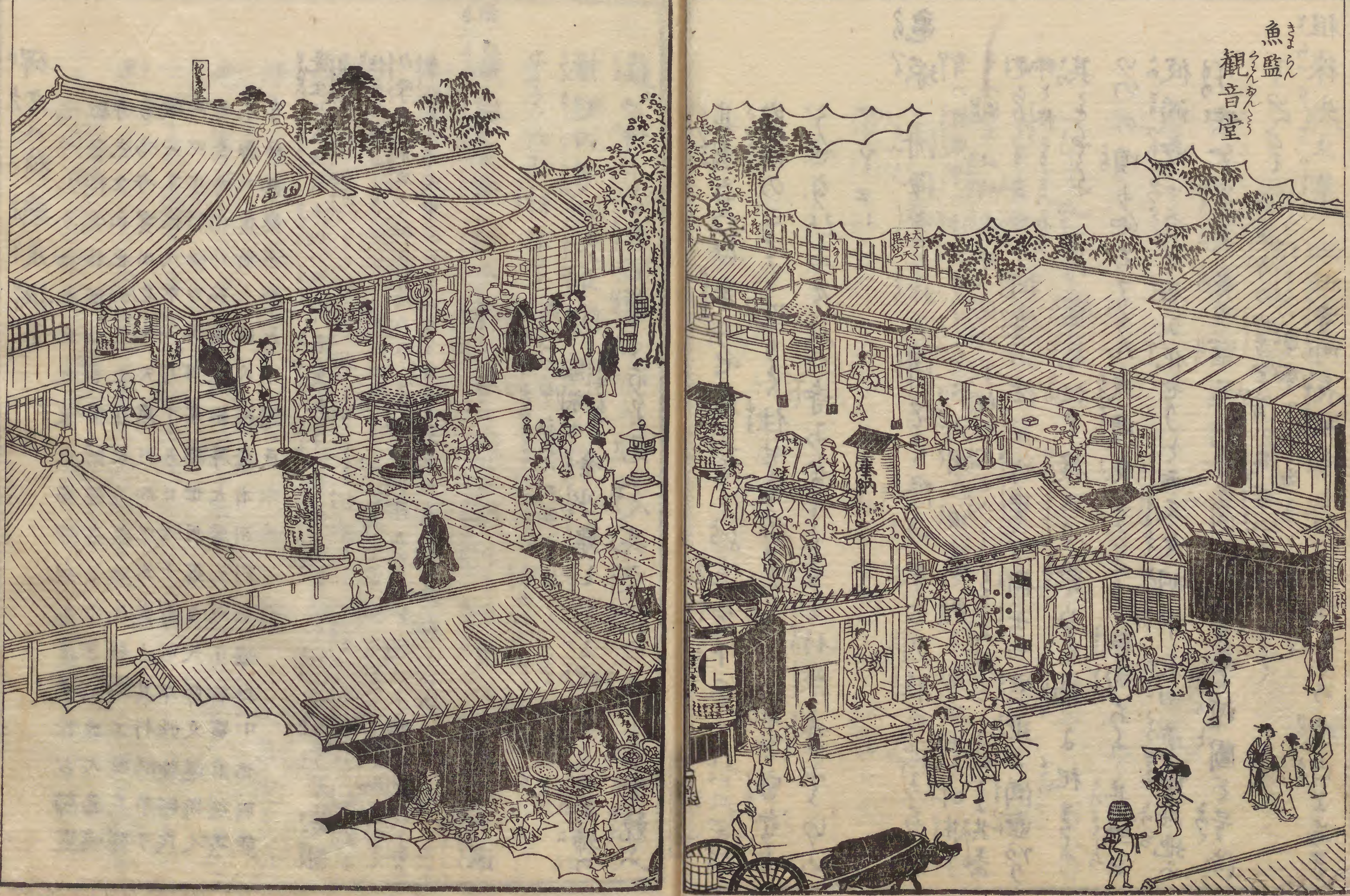
引うけて飛様に逃ぬると申出て此をのこを尋ぬるになかりしを
なきも論なく本の國にこそ行らめと公よりも使下りて追ふに
勢田の橋こぼちて得行やらず三月といふにむさしに
國にいきつきて此をのこを尋ぬるに此御子公使をめして
我さるべきにやありけん此男の家ゆかしくてゐて行と
いひしかバゐて來り いみじくこゝありよく覺ゆ この男罪
しれうぜられバ我ハいかであれと是も前世に此國に
跡をたるべきすくせこそありけめはや歸りて公に此
よしを奏せよと仰られけれバいはんかたなくてのぼりて
御門にかくなんありつると奏しけれバ云かひなし其男
を罪しても今ハ此宮をとりかへし都にかへし奉る
べきにもあらず竹柴のをのこにいけらん世の限り
むさしの國を預けとらせて公事もなさせじたゞ宮に
其國あづけ奉らせ賜ふよしの宣旨下りけれバ此家を
内裏のごとく造りて住せまゐらせたる家を宮など
うせ給ひにけれバ寺になしたるを竹柴寺といふ
なりと云々

亀塚

済海寺の北に隣りて隠岐家の別荘の地にあり
昔ハ竹柴寺の境内なりしを御開國の頃地を割て隠岐家の別荘となる
ありけるに此時亀塚ハ隠岐家氏附の内に入りしとぞ其塚のうへに其主の
建られたる亀塚の相傳ふ往古竹柴の衛士の宅地に酒壺あり
碑と称するものあり
其ところに一つの霊亀栖て後土人崇めて神に祀れり
いつの頃にやありけん或時夜をとゞろかし風雨ありて其翌日
彼酒壺一堆の石に化せりと云又文明中大田道灌此地に
斥候を置其亀の霊あるをしりて其處を河圖と号け
とぞ
今も済海寺の山号を昔ハ亀塚山と唱へしとぞ
土人ハ亀塚の済海寺とよべり

祖徠先生墓

三田寺町長松寺といへる浄家の境内にあり



魚藍観音堂

碑文ハ猗蘭侯撰せ

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道
鄒魯博究物理立言修辭德崇名垂不朽莫大焉嗚
呼先生出也如日之升也乃影之及無所不照其朦
焉嗚呼實出先生天意可知也其爲人其行狀弟子
識矣享保戊申正月十九日六十有三卒姓物部茂
卿以字行銘曰洋洋聖謨世用惑久天降文運斯人
云受乃化乃弘徽猷維厚大業已成日新冨有瑕其
不壽天奪斯人匪天維奪有司列辰嘻我小信瑕能
享神盛德不朽永于隴氏

先生ハ荻生氏本姓ハ物部名雙松字ハ茂卿字をもつて行る一号ハ蘐園通称ハ惣右衛門と云 父ハ方庵と号して官医より先生父に従て南総に住せ五歳ゆしくて文字を識十五歳よく文を属せ家極て貧しく東都に出て力学して業成て柳澤侯の挙る遇ひ食禄五百石を賜ハり編修惣裁となる享保十三年戊申正月十九日に卒せ著述の書八十餘部といふ

魚籃観音堂 同所浄閑寺といへる浄刹に安置して本尊ハ木像ゆしく六寸計ある 面相唐女のごとくゆしくて右の御手に魚籃を携 左の御手ハ天衣を持したまへり

縁起曰唐元和年間 憲宗の年号なり 金沙灘といへる地に一人の美婦の籃を持して魚を鬻くあるを見る人其容貌の麗しきを競ふ女の云く我性佛経を悦ふ若早く通せむ人あらハ夫とせんと云其中に馬氏なる人あり是をよくそ依此女をむかへけるに程なく死せり馬氏悲みに堪ず日を経て後異僧来りて馬氏と共に塚をひらくに靈骨こと〴〵く金鎖となりて光を放つ是より其國こと〴〵く三寶を崇ふとなむ 初金沙灘に應化ましまして妙相をあらハして魚籃観音と号けたてまつる 爰に當寺の開山称誉上人自の師法誉上人肥州長崎に遊化の頃一老婦より此靈像を感得し元和三年丁巳豊前國中津といふ地に假に浄舎を営て御座を構へて魚籃院と号して竟に寛永七年庚午三田の地に奉安せしを称誉上人其地の所せまきを歎き承應元年壬辰正に今の地に移し當寺を建立す尓より緇素ますます渇仰し衆人打群て歩を運ぶようも靈應いやまし香煙常に風に靡き梵唄うたた林り
こといふ

潮見坂　聖坂の南伊皿子臺町より田町九丁目へ下る坂をいふ

或人云潮見坂旧名ハ潮見崎と呼びしとぞ古ハ此辺に七崎ありしと云按に潮見崎月岬袖ヶ崎大崎荒蘭崎千代ヶ崎長南ヶ崎是等を合せて七崎といひしか

伊皿子薬師堂　潮見坂より高輪へ下る坂の左側にあり寺を醫王山福昌寺と号す（天台宗城琳寺に属す）本尊薬師佛の像ハ智證大師の作にして右大将頼朝卿の念持佛なりしとぞ往古相州鎌倉の佐介谷にありて薬師堂といふ其のち騒乱の時住僧護持して當國品川の地に移し奉る（今の御殿山の地なり）終に寛永年間今の地に安置すといふ（今鎌倉佐介谷に薬師堂跡と字する地あり其旧跡なるべし）

東鑑曰

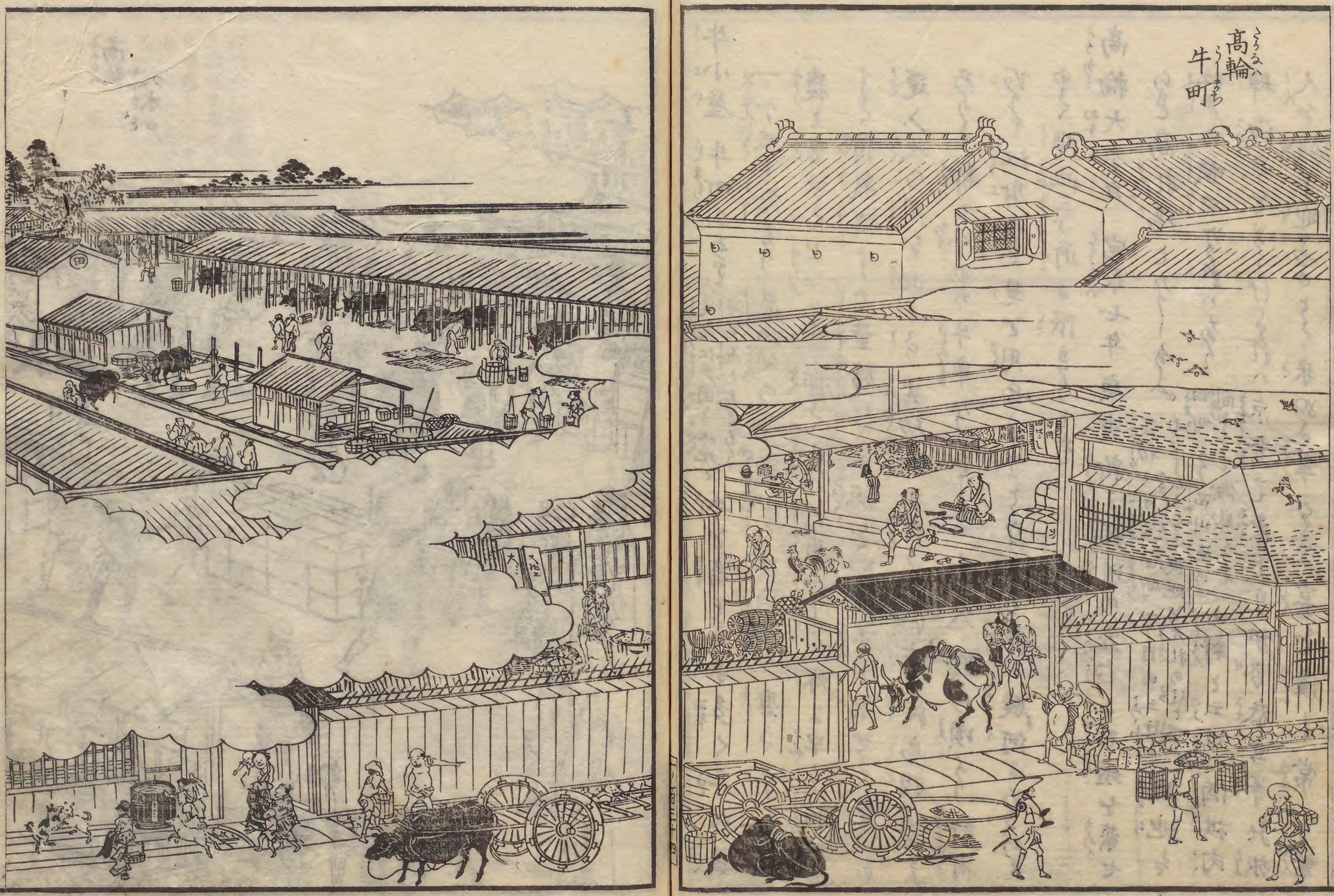
建保六年戊寅十二月二日庚子右京兆依靈夢所令草創給之大倉新御堂安置薬師如來像（雲慶奉造）今日被遂供養導師莊嚴房律師行勇（呪願圓如房）阿闍梨遍曜堂達頼覺房良喜（供若宮僧也）施主並室家等坐簾中

按に東鑑にある此薬師佛を運慶の作とし寺傳智證大師とす又東鑑に右京兆とあるハ北条右京太夫義時のことなるべし

伊皿子薬師堂

牛小屋 牛町にあり（延宝江戸図に此地を牛の尻と云とあり）牛を畜ふる家多く牛の數一千疋に餘れり 養ふ処の牛額小く其角後に靡きてこれを藪覆と号けて上品なりとす 都て牛ハ行事正しく殊に早し 形貌にして精氣撓す力量勝れたれバ軛をかけ重を乗せて遠きに運ふ人の用を助る事其功誠に少からず 古ハ淀鳥羽にのミありて都の外にハ牛車なかりしに 御入國の頃より許宥ありて江府にも是を用ゆることなりしとぞ 餘ハ駿河にあるのミにて唯此三ヶ所に限れりとぞ

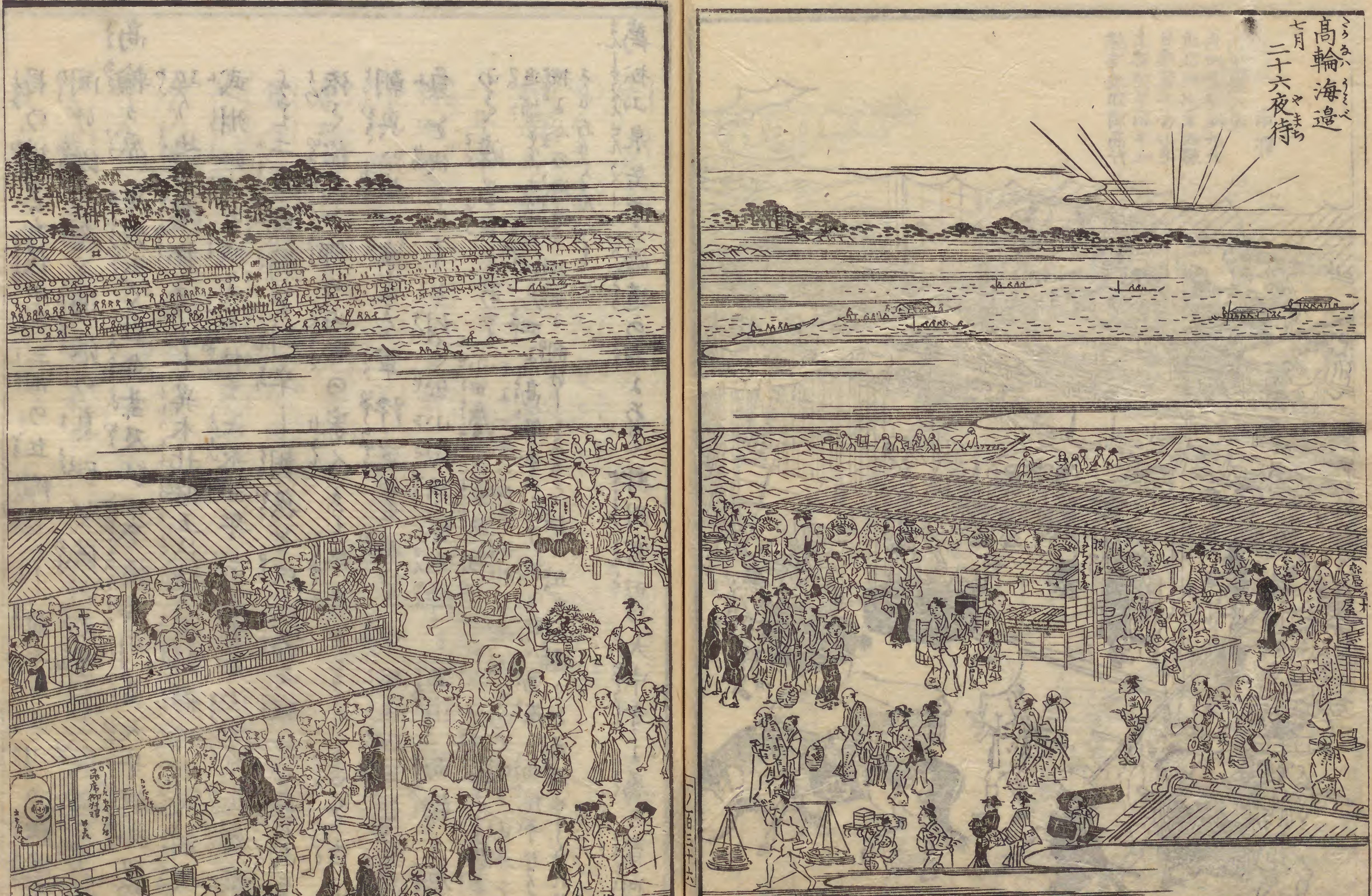
高輪大木戸 宝永七年庚寅新に海道の左右に石垣を築せられ高札場となし給ふ（其初ハ同所田町四丁目の三辻にありし札を今も彼地を元札の辻と唱ふ）此地を江戸の喉口なれバなり（田町より品川迄の間中にて海岸なれバ七軒と云 此辺ハ酒旗肉肆海亭をまうけたれバ）京登りまたは東下り伊勢参宮等の旅人を餞り迎ふるとて来れる輩ここに宴を催し常に繁



高輪 牛町

高輪
大木戸

緑海旋郊関高阡
上路開早朝平吐
日残霧半含山遠
近征帆出東西驛
馬班長安從此去
萬里幾人還
南郭



高輪海邊（たかなわうみべ）
七月二十六夜待（やまち）

国立公文書館
National Archives of Japan

昌の地なりし後ハ三田の丘綿々とし前ハ品川の海遥に開け渚に寄る浦浪の真砂を洗ふ光景いと哀興あり

高輪ヶ原 里老云く白金臺及ひ二本榎品川臺大井村抔の辺り迄の惣称なりとぞ異本北條五代記に上杉修理太夫朝興武州江戸の城に居住を大永四年正月十三日小田原北条家よりも二万餘騎を引卒し朝興を攻んために彼地を發向せ依て稲毛六郷の上杉の家人よりも早馬をもて急を告る朝興ハ假の事なれバ軍評定にも及ハず中途に出迎ひて勝負を決すへしと討て出小田原の先陣と品川高輪ヶ原にて渡しも合とあるも小田原記に永禄信玄小田原を攻むとき條下には一手ハ江戸品川の縄嶋の辺を焼き民屋を追捕すとあり又江戸咄ハ高縄手とあり然る時ハ高縄ハ高縄手なり按ずに今の海道ハ後世に開けしものにて古へハ丘の上通りを通路せしなれハさもありなん

萬松山泉岳寺 海道の右にあり 野州冨田の大中寺に属せる曹洞宗江戸三箇寺の一員なり 橋場總泉寺 芝青松寺 當寺なり 坊舎三宇学寮九宇あり當寺ハ往古慶長年間台命を奉して門庵宗関和尚外櫻田の地に創建する所なれ禅刹なりしも後寛永十八年辛巳再命ありて寺を今の地に移したりとの本尊釋迦如来ハ座像二尺計あり脇士ハ文殊普賢なり總門の額萬松山の三大字ハ華僧闇沙門道霈の書にして康熙辛酉孟冬上浣と記せり

當寺ハ浅野家の香花院にして其家累代の兆域あり又浅野内匠頭長矩及ひ義士四十七人の石塔ある方丈より南の丘なる半腹にあり傍に當寺住僧建る所なる石碑ありて其旨趣を注せ二月三月の四日及ひ正月七月の十六日等にハ英名を追慕して集ふ人少からず又當寺に義士等の遺物を収蔵せるもの多し

浅野家の
義士墓を
いたむ
其角
学寮
中門

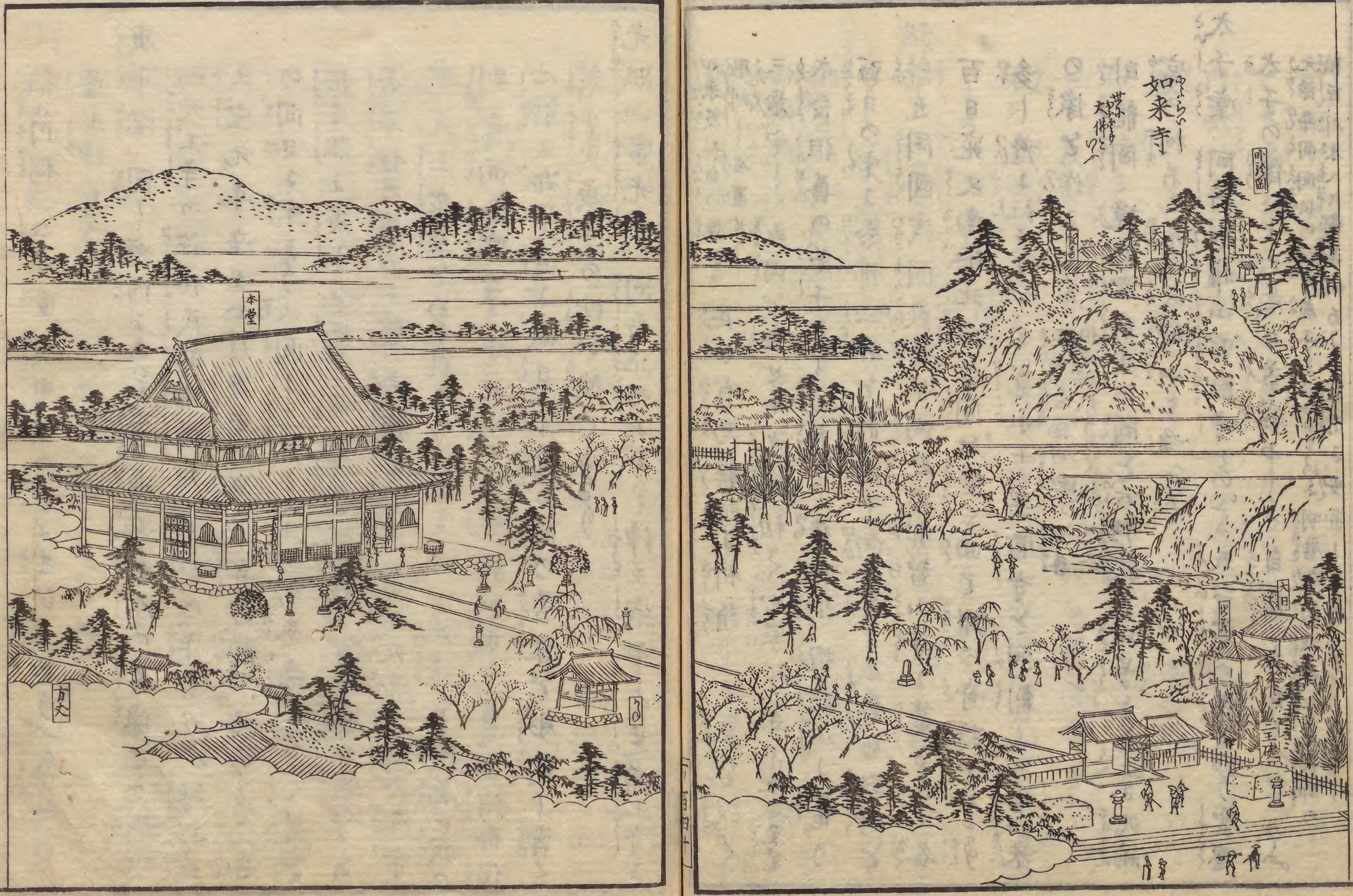
泉岳寺（せんがくじ）
本堂
学寮

元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英を刄傷に及ぶによりて長矩は死をたまふ後其家の長臣大石内蔵助良雄本國播州赤穂に在て君の讐ハ共に天を戴べからずと云の義によりて血盟を以て同志の者をかたらひ終に元禄十五年十二月十四日讐家に至て義士四十七人義英の所在を捜して其首級を得當寺に至て亡君の墓前に祭るの後誅を待て翌十六年二月四日自殺せしかりハ諸書に詳なるを以てこゝを省く

歸命山如来寺 大日院と號す泉岳寺の南に隣る天台宗にして東叡山に属せり本尊五智如来ハ座像各一丈あまり 俗に芝の大佛と称す 奇特の佛と号せり 木食但唱師の彫造なり 但唱ハ佛工にしてことに佛躰を作るに妙を得たり故に京都鳴滝の五智山に安置する所の石像の但唱多し 五智如来十三佛等ハ但唱の作にして并に自の像とも 摂州有馬郡高須村の産なり 彼所に霊亀山與勝寺と云古刹ありしを再興して釋迦如来及ひ自の像をも彫刻し安置せり 其母有馬薬師に祈請して是を設く三歳にして魚肉を食せず九歳初て出家す年十五に至て木食但善の弟子となりて夫より後信州檀特山に篭り百日の中に念佛三昧を修得し向の峯に三尊の影向を拝す同國浅間嶽及ひ南紀の那智山等に篭ること各百日宛又南海北濵の間を普く回て諸の奇特をあらはす事多し終に江戸に下て寛永十二年當寺を開創し五智如来の像を作るといふ 三時念佛の勧ハ但善但唱二代にして絶たり

臥龍岡 境内堂前北の岡を云形状を以号とす上に天満宮の祠あるゆへに天神山と唱へり

太子堂 同所旭曜山常照寺といへる天台宗の寺にあり聖徳太子の像ハ十六歳の尊容にして自作なりといふ 元禄年間開板の江戸鹿子といへるものに明暦年間越後守光長卿の陪臣川木八兵衛某故ありて此所に安置しそまつると あり



如来寺
世俗大仏といふ
毘沙門
天神
秋葉
大日
二王門
本堂
方丈

稲荷祠　太子堂庚申堂の中に並び立せり　高輪の
産土神なり
庚申堂　同じ境内にあり本尊ハ青面金剛の木像なり摂州
四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作なりといふ縁起云
大宝元年辛丑正月庚申の日ハ一年の間に六度ありて八専
の間日に中れり人間に三尸といふ三の悪蟲ありて災を
招く然に庚申を祭る時ハ此蟲退散し身に幸を来らしめ
若不信の輩ある時ハ命根を吸悪業を天帝に訴ふ今帝
釋天王衆生をあはれミ給ふ故に汝に此法を附属す我ハ
則青面金剛なりとて又十二の誓願を示し給へり僧都信
心肝に銘し直に感見しける所の尊容を彫刻し普く
衆生に庚申の法を授くとなり
光照山常光寺　同所北町にあり浄土宗にして芝増上寺に
属す開山を大誉上人と号ス本尊ハ金像の阿弥陀如来
なり（世に信州善光寺分身の弥陀如来と称す）縁起云此霊像ハ聖徳太子難波
の堀江の水面より出現ましましてその像を鋳さ
しむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵國の住人
岡部六弥太忠澄摂州蘆屋の里に陣しける時或翁
此像を忠澄に受与す忠澄大に歓喜し鎧櫃に収め
出陣す然に霊威のありて危難を除き剰へ忠度を
討て武名を顕せり依て代々其家に傳へしを獨夜と云僧
故ありて増上寺第四十六世前大僧正定月和尚へ奉る
遂に定月和尚件の旨趣を自記しあひ本尊と共に
當寺に収められしといふ此故にや當寺境内に岡部六弥太の
墓と呼ぶ古き石塔の破壊せるものを存せり
珠玉山宝蔵寺　同所にあり浄土宗にして芝増上寺に属す

太子堂
稲荷社
庚申堂
庚申
稲荷
太子
高輪海辺

常光寺
本堂
方丈
弁天

開山ハ順清法印と号し往古ハ慈覚大師開創の梵刹にして天台宗なりしといへども其の頃より今の宗風に轉して七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興す本尊阿弥陀如来の像ハ善導大師の作にして御手に宝珠を持し給ふ故に世俗宝珠阿弥陀如来と称す（本尊の背面に永隆元年十一月十七日彫刻と鐫付く）

あり

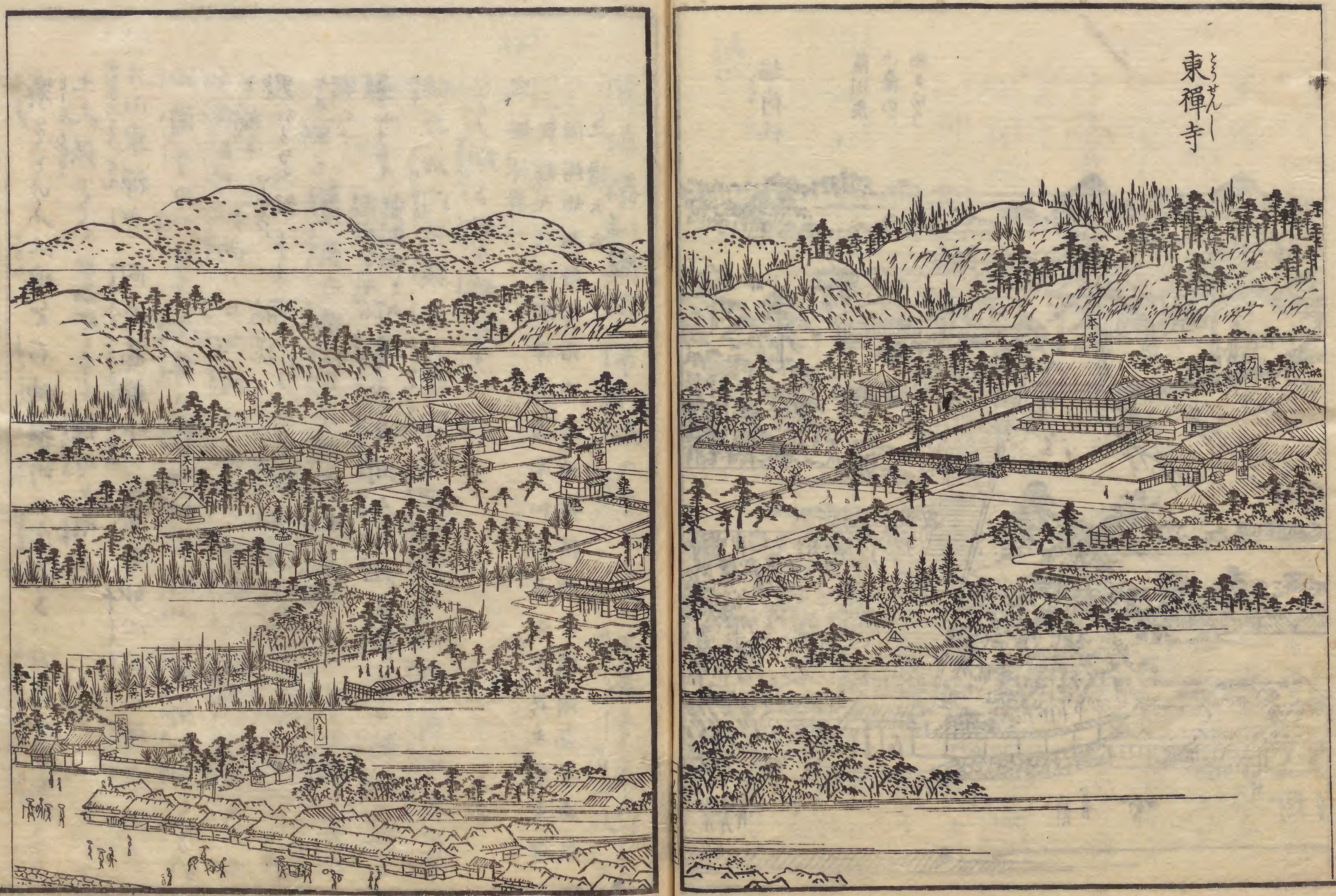
子安観世音当寺に安置画像にして延喜帝の宸筆なりと云縁起一巻あり（画縁起ハ土佐光信と云略縁起ハ和田義盛撰する所といふ）縁起略に云建久元年十一月右大将頼朝卿上洛を其途中一人の婦ありて告て云く此霊像ハ梁武帝末皇太子にましまし時常に観音を祈念しけるに或時此霊像を感得なしおはしけれ程なく太子降誕ましましせり昭明太子是なるに其後此霊像本朝に渡りまし給ふ

欽明天皇御崇敬あり又醍醐天皇も尊信ならせたまひ震翰を注き縁起を作らせたまふことを将軍にまふとなり頼朝卿これを得たまひ鎌倉に安置し給ふ信浅からさるゆゑに其頃和田左衛門尉義盛再縁起を書添ふしとなり此霊像鎌倉兵乱の後當寺に遷し奉りしをそとぞ

辨財天　慈覚大師江州竹生島に詣でたまひし頃海中波間に影現ありし宇賀神の形を摸擬し御長七寸三分に彫刻なしたまひしを當寺に安置しまゐらせるとなり

石神社　同所高輪南町鹿児島久留米両侯の間の小路を入て西の方二丁斗にあり祭神詳ならず同所天台宗安泰寺の持なり昔ハ遮軍神に作れり寄願ある者成就の後ハ必何によらず樹木を携へ来て社地に栽る

高山稲荷社
薩州侯の藩の南にあり


東禅寺（とうぜんじ）
本堂
方丈
開山堂
庫裡
塔中
天神
経堂
山門
総門
八まん

賽をとりふ此地を石神横町と字せるハ此社あるゆへなるべし
土人誤りてせきやとし横町と唱ふ

佛日山東禅寺 同所高輪中町にあり妙心派の禅宗 江戸四箇寺の一なり本尊ハ釈迦如来開山ハ嶺南和尚と号く宝鑑国師と諡を和尚ハ日向国飫肥の人守永氏肥前守祐良の五男なりしが幼より佛門に入て後宗門の大徳となれり 寛永二十年癸未七月廿七日寂を歳六十二 慶長の頃江戸に来り阿左布に一宇を開く当寺是なり 其地を今も霊南坂と云 寛永年間今の地に移さる総門ハ海に臨む此門の額海上禅林の四大字ハ朝鮮国雪峯が筆なり頗る世に称せり

宝鑑録云
勅諡大法鑑禅師嶺南和尚大心中興主盟東禅
開闢始祖得法洛西之地揆轉向上機關盛化海東
之邊云云

有喜寿八幡宮 寺外右の方にあり安泰寺奉祀す

此地を有喜寿の森と号く 或人云古へ老樹の柊一株ありて鵜の塒なりしかば鵜樹巣ともかくといへり

谷山

今云所ハ品川の入口にありて海に臨む丘をさしていふ しかれども昔ハ大日山と号けるとぞ 紫の一本といへる草帋に昔此地に出崎ありしとも或ハ諸侯八人の第宅ありしゆゑしか唱ふるといへども証とするにたらず 谷山ハ邑名にして目黒の南より袖ヶ崎仙臺侯別荘の地の辺へかけて都て谷山村なるべし此地に限る地号にあらず 大日山とよびしハ昔此地に石像の大日如来立せありし故なりとぞ 後世其堂宇破壊せし頃谷山稲荷の地にうつし又品川北馬場の光厳寺へ収めるといへど今ハ其石像の所在をしらず

江戸名所圖會天樞下終

国立公文書館
National Archives of Japan